

「生徒一人一人の適応感を高めるために」

－中途退学の未然防止に向けた中学校・高等学校の取組－



栃木県教育委員会

はじめに

子どもたちを取り巻く社会環境が大きく変化する中で、児童生徒一人一人の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力をはぐくむ児童・生徒指導の役割はますます重要となってきました。

このような状況において、高等学校における中途退学者については、全国的に減少傾向にあるものの、なお相当数にのぼっており、いわゆるニート、フリーター、引きこもりなどとの関連も指摘されていることから、依然として教育上の大きな課題であると言えます。

本県では、中学校において、中学生本人が目的意識を持って進学先を決定できるよう、キャリア教育や個別の進路指導の充実を図っていただいております。高等学校においては、学習のつまずきや学校生活に悩みのある生徒に対して、個別のきめ細かな適応指導や保護者を交えた面談を行うなど、適切な指導・援助をしていただいているところです。

しかしながら、そうした各学校の懸命な努力にもかかわらず、ここ数年の本県公立高等学校全日制の中途退学率は、全国平均を下回ってはいるものの、その差が小さくなる傾向にあります。また、定時制については、全国平均より高い状況が続いております。

今回、こうした状況をふまえて、県教育委員会では、平成22年度の新規事業として「中途退学未然防止事業」を立ち上げ、全ての高等学校を対象としたアンケート調査や高等学校17校を対象とした聞き取り調査、高校生約2千名を対象とした学校生活に関する意識調査を実施しました。さらに、この結果を受けて「中途退学を未然に防ぐために」をテーマとする中途退学未然防止ワーキングを開催し、子どもたちが、どうして中途退学に陥ってしまうのか、どうすれば中途退学を防げるのかなどについて、様々な御意見をいただいたところです。

協議の中では、高等学校での取組が最も重要であることは当然のことながら、加えて中学校の果たす役割も関係することなども指摘され、それぞれの学校種でのどのような取組が一人一人の満足感や適応感を高め、未然防止につながるのかなどを明らかにしてまいりました。

本資料はそのまとめとして作成されたものであり、対策としての3つの手立てや中学校、高等学校で実践されている有効な15の取組事例などが紹介されております。各学校におかれましては有効に活用され、中途退学の未然防止につながっていくことを切に願っております。

結びに、本資料の作成にあたり、飯田座長をはじめとする各ワーキング委員の方々に御尽力いただきましたことを心から感謝申し上げます。

平成23年3月

栃木県教育委員会事務局学校教育課長 山形 昭夫

目次

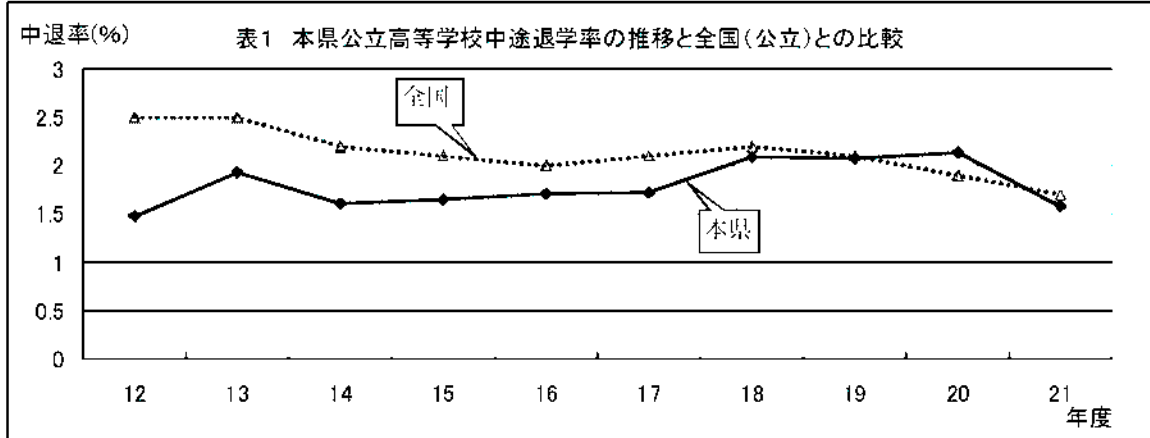
はじめに

1	栃木県公立高等学校における中途退学の現状	1
(1)	中途退学率の推移（全国との比較）	1
(2)	中途退学事由別構成比（全国との比較）	1
(3)	学年別の中途退学率	2
(4)	月別の中途退学率	2
(5)	不登校に占める中途退学者の割合	2
2	中途退学への対策	3
(1)	「中途退学者等の調査」結果から	3
(2)	「学校からの聞き取り調査」結果から	4
(3)	「高校生の学校生活に関する調査」結果から	6
3	中途退学を未然に防ぐための3つの手立て	8
I	クラスの中で、生徒一人一人の自己存在感や自己肯定感を高める取組	8
【事例1】	構成的グループエンカウンターを活用した不安の軽減と自己肯定感を高める取組によって高校生活への適応を目指す（中学校）	10
【事例2】	「夢いっぱい、花いっぱい運動」の取組を通して、生徒一人一人が夢を持ち、卒業後の進路実現を目指す（高等学校）	15
【事例3】	中学校との連携を深め、適応指導の強化による「居がいのある学校・学級づくり」を目指す（高等学校）	17
【事例4】	ジュニア・キャリアアドバイザー事業を活用した自尊感情の醸成（高等学校）	19
II	教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組	21
【事例5】	生徒理解の質的向上を目指した校内体制づくりと実践（中学校）	23
【事例6】	道徳、特別活動、総合的な学習の時間と関連付けたソーシャルスキルトレーニングの実践（中学校）	25
【事例7】	学校と保護者とが連携・協力し学習環境の改善を目指した取組（高等学校）	27
【事例8】	各部の連携による実態把握及び組織的な指導（高等学校）	28
III	将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組	30
【事例9】	「卒業後の進路調べ学習」を通して、自己の興味・関心及び適性を生かした進路選択を目指す（中学校）	32
【事例10】	保護者啓発の取組による三者（生徒・保護者・教員）で考える進路指導を目指す（中学校）	34
【事例11】	立志式での決意発表を通して、希望進路実現に向けての意欲を高める取組（中学校）	36
【事例12】	関係機関との連携による不登校生徒への適切な支援（中学校）	38
【事例13】	「課題研究」を通じた生きる力の醸成（高等学校）	40
【事例14】	学び直しと学校適応を指導・援助する取組により学校生活・学習への不適応生徒の減少を目指す（高等学校）	42
【事例15】	居心地の良い学校づくりを目指した中学校と高校の連携 ～高校生活をスムーズにスタートさせるために～（高等学校）	44
4	その他	46
(1)	発達障害等のある生徒の指導内容等の中学校から高等学校への引継ぎ	46
(2)	関連資料及び相談機関	48

1 栃木県公立高等学校における中途退学の現状

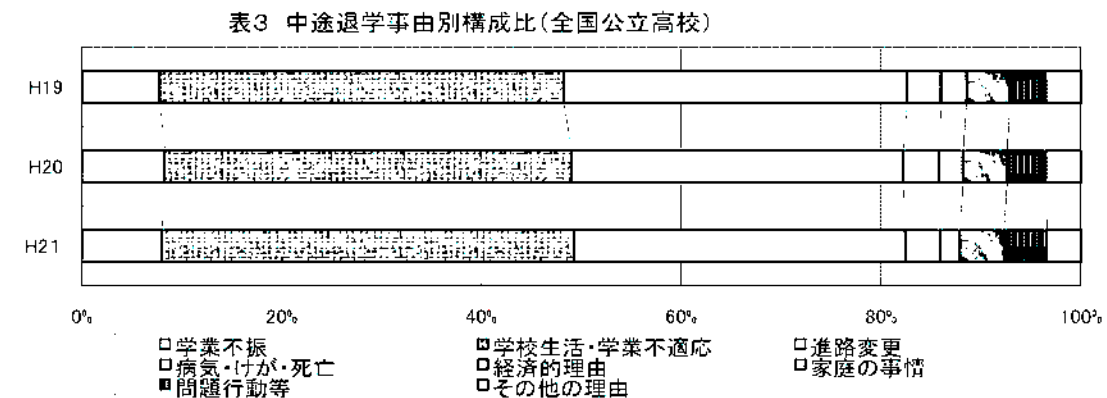
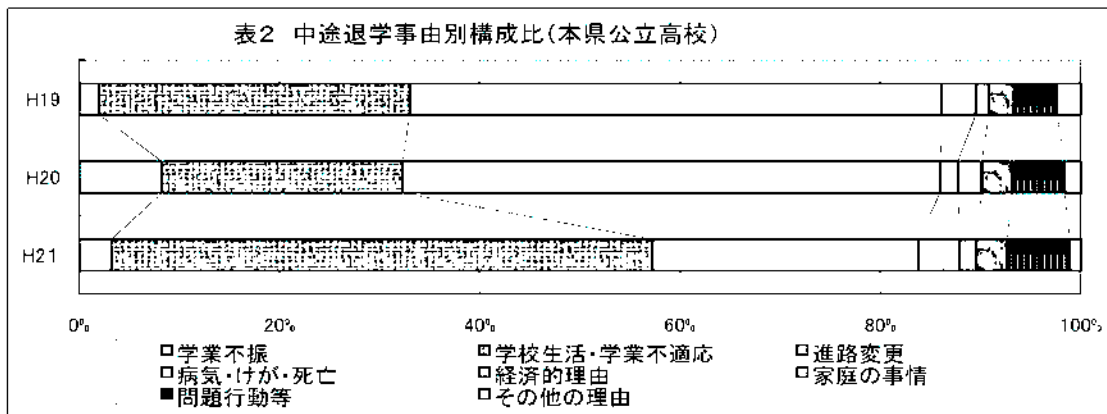
(1) 中途退学率の推移（全国との比較）

ここ数年の本県公立高等学校における中途退学率を見ると、表1にあるように、平成12年度は本県と全国の間には約1ポイントの開きがあった。その後、徐々に全国の中途退学率に近づき、平成20年度には逆転した。平成21年度には全国を0.12ポイント下回ったものの、依然として高い状況が続いている。



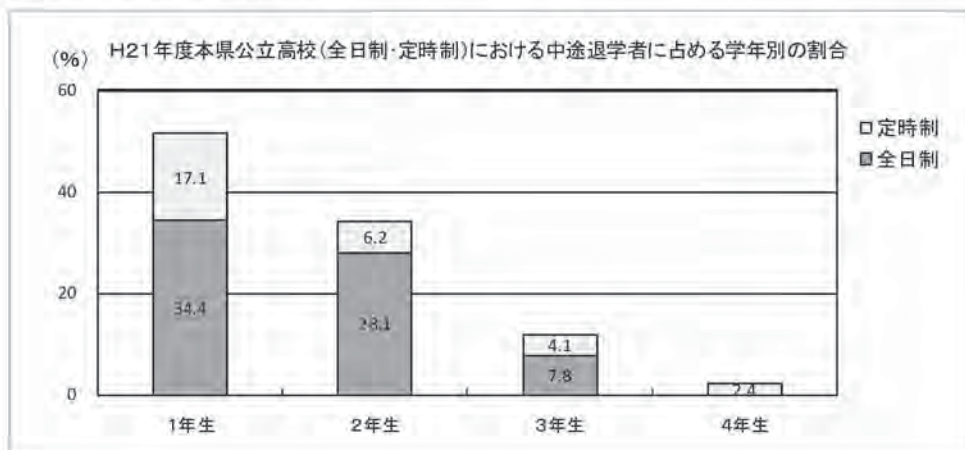
(2) 中途退学事由別構成比（全国との比較）

表2にあるように、本県の事由別構成比は、平成20年度までは、「就職希望」や「別の高校への入学を希望」などといった【進路変更】を理由として中途退学する生徒の割合が高い状況にあった。しかし、平成21年度は、「もともと高校生活に熱意がない」や「授業に興味がない」などといった【学校生活・学業不適応】を理由として中途退学する生徒の割合が高くなった。



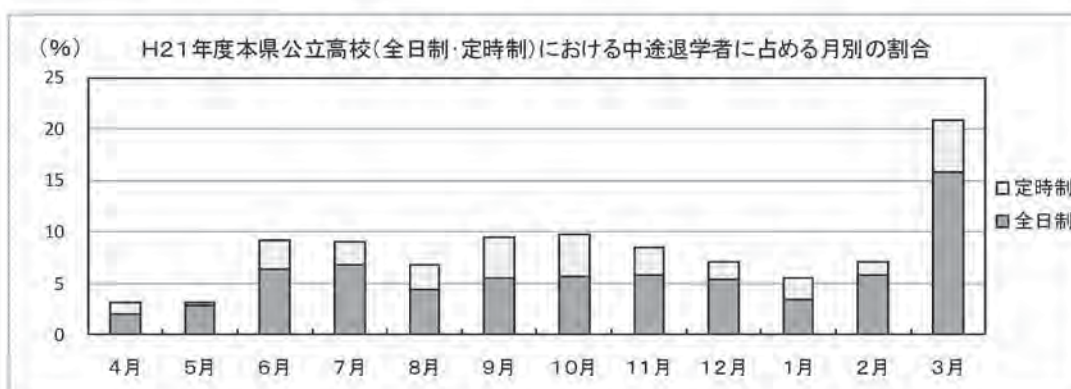
(3) 学年別の中途退学率

学年別に見ると、高校を1年間に中途退学する生徒のうち、1年生が約50%を占める。これは、例年、同じ傾向である。



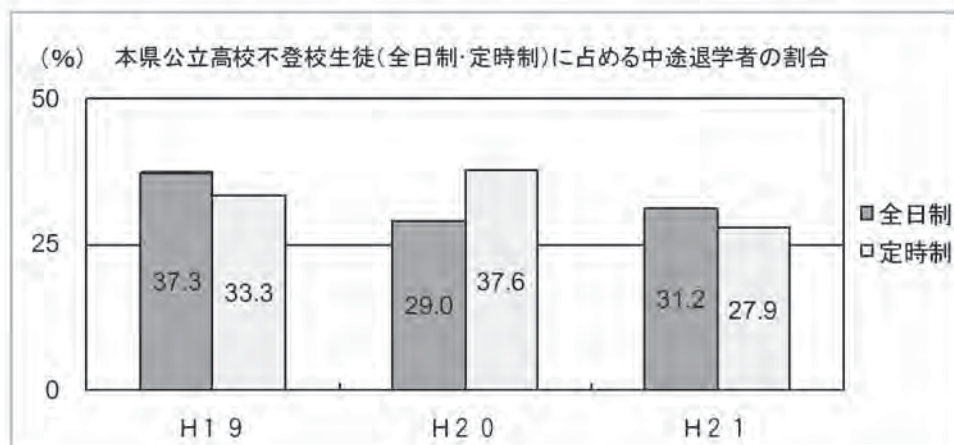
(4) 月別の中途退学率

中途退学の月別の割合(%)を見ると、5月の連休明けの6～7月、夏季休業明けの9～10月、年度末の3月に中途退学率が高い。



(5) 不登校に占める中途退学者の割合

高校の不登校生徒のうち、毎年、約3分の1が中途退学している。



2 中途退学への対策

中途退学者の中には、教師と生徒、保護者が真剣に向き合って、十分に話し合った結果、生徒の将来を考えたときに、就職したり、別の高校や専修・各種学校に入学したりするなど、前向きな進路変更もある。

しかしながら、「もともと高校生活に熱意がない」、「授業に興味がわからない」、「人間関係がうまく保てない」、「学校の雰囲気があわない」などの【学校生活・学業不適応】を理由として中途退学してしまう場合、中学校や高校の早い段階から適切な対応が必要である。

そのため、今回は、(1)「中途退学者等の調査（全ての県立高校）」や(2)「学校からの聞き取り調査（県立高校から抽出した17校）」、(3)「高校生の学校生活に関する調査（県立高校から抽出した生徒約2千名）」を実施し、中途退学に陥ってしまう原因分析とその対策を検討した。

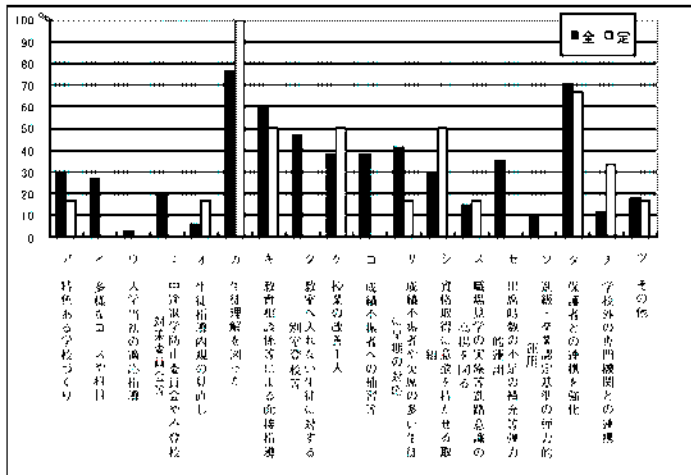
(1) 「中途退学者等の調査」結果から

平成20年度と平成21年度の中途退学者数を比較して、「減少した学校」には効果があった取組について、また、「増加又は同じであった学校」には減少しない理由についてそれぞれ調査を行った。

中途退学を未然に防ぐためには、日頃から、様々な機会を捉え生徒理解に努めるとともに、保護者と連携しながら、適切な手だてを講ずる早期発見・早期対応の取組が重要となる。

また、高校で友人関係がうまく結べなかつたり、家庭内に問題を抱えたりと、様々な理由で中途退学者が増加している学校がある。これらの問題に対しては、担任一人で抱え込むことなく、対策を含めた校内での情報を共有するとともに、早い段階から組織で対応していくことが大切である。

さらに、学校だけの対応では限界もあることから、日頃から、関係機関等と密接な連絡をとっておくなど、それぞれの機関の機能や所在、担当者を知っておくと、その後の連携を円滑に進めることが可能となる。

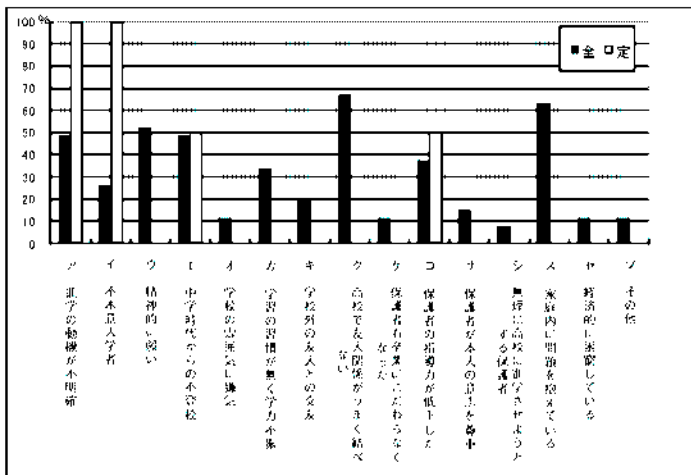


① 中途退学者が減少した学校の効果があつた取組（複数回答）

中途退学者が減少した学校は、「カ 生徒理解を図った」や「タ 保護者との連携を強化」を主な理由にあげている。

また、「ツ その他」として、中学校を訪問して、高校の教育内容を丁寧に説明したため、不本意入学の生徒が減少したなどの回答もあった。

（全日制34校、定時制6校）



② 中途退学者が増加又は同じであった学校の減少しない理由（複数回答）

中途退学者が増加又は同じであった学校は、「ク 高校で友人関係がうまく結べない」や「ス 家庭内に問題を抱えている」を主な理由にあげている。

（全日制27校、定時制2校）

(2) 「学校からの聞き取り調査」結果から

高校の生徒指導主事などから、学校で実践している中途退学を未然に防ぐための取組について聞き取りを行った。

① 中途退学を未然に防ぐための取組として、学校が取り組んでいること

各高校においては、「未然防止の観点からの取組」や「問題行動等への対応」、「担任を中心とした取組」など、様々な観点や場を設定しながら、一人一人の生徒に対するきめ細かな対応をしていることが伺え、他の学校においても大いに参考になると考えられる。

ア 未然防止の観点からの取組

- ・ 1年生全員を対象とした、構成的グループエンカウンターなどの人間関係づくりのプログラムを実施している。
- ・ 学校祭や体育祭、部活動指導において「自己肯定感」を高める指導を心がけている。
- ・ できるだけ部活動加入を推奨し、生徒の居場所づくりを心がけている。
- ・ 連絡がなく欠席した生徒については、担任が必ず保護者に連絡し状況を確認する。
- ・ 学校を2～3日休む生徒に対しては、担任や教育相談担当が早期に家庭訪問をし、様子を聞いている。
- ・ 学習面での落ち込みを解消するため、「学び直し」として小・中学校の内容の復習をさせている。
- ・ 成績不振者に対して、早めに補習を実施している。

イ 問題行動等への対応

- ・ 生徒指導部を中心に、マニュアルに沿った組織的な対応をしている。
- ・ 生徒が問題行動を起こした場合、保護者に学校に来てもらったり、家庭訪問をしたりすることで丁寧に説明し、事の重大さを伝えるとともに、とことん面倒を見る姿勢で当たっている。
- ・ 保護者に学校に来てもらう場合、母親が約9割であるが、できるだけ両親に伝えるよう努力している。
- ・ 別室登校規程を作成し、全教職員が歩調を合わせた指導をしている。
- ・ 長期休業を有効に活用し、欠課時数が多い生徒などへの補充指導をしている。
- ・ 精神科医を招いた校内研修を実施している。
- ・ 事例研究会を定期的実施し、学校全体で共通理解のもと、対応している。

ウ 担任を中心とした取組

- ・ 生徒との信頼関係を得るために、教師が率先して自己開示をしたり、相談しやすい雰囲気を作ったりすることで、生徒との信頼関係の構築に努めている。
- ・ 些細なことでも、生徒と十分に話し合うよう努めている。
- ・ 授業のない時間帯も校内巡視をしたり、教科担任に気になる生徒の様子を聞いたりしている。
- ・ コミュニケーションをとることが苦手な生徒にも声をかけ、自分のことを考え、信頼してくれているという気持ちにさせている。
- ・ 退学したいと申し出る生徒に対しては、親身になって相談に応じ、進路について時間をかけて考えさせている。
- ・ 保健室利用の生徒の情報も、養護教諭から随時聞くよう心がけている。

エ 職員会議、学年会等の取組

- ・ 職員会議で不登校気味の生徒の近況などを報告し合い、情報を共有化する。
- ・ 教育相談だよりを発行し、教職員や生徒、保護者への情報提供をする。
- ・ 毎月「いじめ・不登校対策委員会」を開催している。
- ・ 各学年会では、クラスごとの細かな情報交換を実施している。

オ 面接週間、教育相談日の開設

- ・ 各学期ごとに面接週間を設けている。
- ・ 教育相談日を開設し、教育相談室において問題を抱える生徒に対応している。
- ・ 毎週、教育相談係の打合せや情報交換を実施している。

カ 各種調査の実施

- ・ 国や県からの調査とは別に、学校不適応傾向調査を年3回実施している。
- ・ 毎月の出席統計調査を実施し、担任だけでなく学校全体で欠席が多い傾向のある生徒の状況を把握している。

キ 中学校・高校、保護者、関係機関等と連携した取組

- ・ 合格発表後から入学式までの間に中学校との情報交換ができるよう、地区中高連絡会を開催している。
- ・ 1学期のうちに、1年生の情報を中学校に伝えるようにしている。
- ・ 地区内の中学校と高校の間で、授業見学会を開催している。
- ・ 定期的な保護者面談を実施するほか、保護者への来校依頼や家庭訪問等を、場合によって使い分けている。
- ・ 専門的なケアが必要な生徒には、スクールカウンセラーを活用している。
- ・ 電話連絡等、できる限り学校の情報を家庭に知らせよう心がけている。

② 困難（悩んでいることや当面解決したい）と考えていること

中途退学未然防止に向けた取組を実践するに当たり、困難だと考えていることを聞き取ったところ、生徒や保護者との関わり、関係機関との連携等があげられた。教職員間の連携を密にした組織的対応とともに、常日頃からの家庭との連携については、改めてその重要性が感じ取れる。

- ・ 保護者と連絡がつかなかったり、協力が得られなかったりする場合がある。
- ・ 欠席日数が増えると、保護者が先にあきらめてしまい、生徒が学校に登校するための働きかけが弱くなる。
- ・ 担任や保護者への相談なしに、生徒自身が突然学校をやめる意思を固めてしまったり、説得しても退学の意志が固かったりする場合がある。
- ・ 問題発生時に、担任が抱え込んでしまうことがある。
- ・ 家庭内に問題を抱えており、学校では解決できないこともある。
- ・ 生徒に社会性が乏しく、どう対処してよいか分からなくなる場合がある。
- ・ 担任や教育相談係との連携が不十分で、状況把握や早期対応に遅れがある場合、その後の対応が難しくなることもある。

③ 生徒指導主事として中学校とともに取り組みたいこと

中途退学の防止に向けて、中学校とともに取り組みたいことについても聞き取りをしたところ、中学校と高校の連携を図りながら、不本意入学や学校不適応を理由とする中途退学を未然に防ぐための取組の一層の充実を図る必要があることなどがあげられた。

中学校においても、生徒を高校へ送るまでの責任という考え方ではなく、高校生活も見据えた指導を行う必要があるとともに、高校側からの中学校へのアプローチも必要である。

〔中学校とともに取り組みたいこと〕

- ・ 高校はどんなところなのか、中学校にもっと詳しく知らせる。
- ・ 中高連絡協議会を積極的に開催し、中学校の頃の学校生活や家庭の状況等、生徒の情報を詳しく伝達する。
- ・ 親の希望優先で不本意入学が最初から分かっている場合や本人の進学意欲が低い場合には、事前に中学校との話し合いの場を設ける。
- ・ 生徒とともに、親の意識を成長させるような取組を充実させる。

〔中学校の時から付けたい力〕

- ・ しっかりと授業を受けるなど、基本的な生活習慣を身に付ける。
- ・ アンケートによると、自分の意志で高校を選択していない生徒が約1割いるため、本人の自己決定力を養うとともに、希望に添った進路指導を強化する。
- ・ 学校を休むことに何の抵抗もない生徒がいるので、安易に学校を休まない力をはぐくむ。

(3) 「高校生の学校生活に関する調査」結果から

① 高校をやめた理由

高校をやめた経験のある生徒にその理由を聞いたところ、「欠席日数や欠課時数が多くなった」や「学校の雰囲気があわなかった」を主なものあげている。

また、中学校で何をしておけば、高校をやめなかったと思うかを聞いたところ、「教師や友人との関係をよくしておけばよかった」や「真剣に高校選びをしておけばよかった」、「将来のことをきちんと考えればよかった」などと回答している。

さらに、高校で何をしておけば、やめなかったと思うかを聞いたところ、「新しいクラスに馴染めればよかった」や「相談できる人が一人でもいればよかった」、「将来のことをきちんと考えていればよかった」などと回答している。

高校ではもちろんのこと、中学校の頃から、教師と生徒、生徒同士の人間関係を良好にし学業指導の充実を図ることで、自分の将来を真剣に考えさせることが大切である。

ア 高校をやめた理由

- ・ 友人との関係がよくなかった。
- ・ 先生との関係がよくなかった。
- ・ 入学したかった学校ではなかった。
- ・ 欠席日数や欠課時数が多くなった。
- ・ 授業に興味をもてなかった。
- ・ 勉強についていけなかった。

イ 高校をやめた時の気持ち

- ・ 親に心配をかけてしまった。
- ・ 頭の中が真っ白になった。
- ・ 今後の進路を考えると不安になった。
- ・ 終わったという感じがした。

ウ 中学校で何をしておけば、高校をやめなかったと思うか

- ・ 先生や友人との関係をよくしておけばよかった。
- ・ 真剣に高校選びをしておけばよかった。
- ・ 将来のことをきちんと考えればよかった。
- ・ 休まないで通っておけばよかった。
- ・ もう少し勉強しておけばよかった。
- ・ 先生の話をよく聞き、校則を守っていたらよかった。

エ 高校で何をしておけば、やめなかったと思うか

- ・ 新しいクラスに馴染めればよかった。
- ・ 相談できる人が一人でもいればよかった。
- ・ 将来のことをきちんと考えていればよかった。
- ・ 授業にきちんと出ていればよかった。
- ・ 部活動をやっていたら少しは違っていただかもしれない。
- ・ 資格をとっていたらよかった。
- ・ 校則を守っていたらよかった。

② 高校をやめたいと思っても学校をやめずに登校を続けられている理由

高校をやめたいと思っても学校をやめずに登校を続けられていられる理由を聞いてみると、「クラスの活動に貢献している」や「クラスに悩みを相談できる友人がいる」、「悩みを相談できる先生がいる」などと回答している。

クラスでの自己存在感があることや教師、友人との人間関係が良好であることが高校生活を満足させ、それが高校をやめずにすんでいる要因となっている。さらに、「親や家族からの励ましがある」や「家族に心配をかけたくない」との回答もあることから、親や家族との関わりも大切である。

このことから、高校をやめたいと思っても学校をやめずに登校を続けられる要因、つまり、中途退学を未然に防ぐためには、クラスでの自己存在感があったり、教師や友人との人間関係が良好であったりと、高校生活を満足させる取組を一層充実させることが重要である。

参考として、学年別や課程・学科別、男女別の区分ごとに、高校生活を満足させる要因として特徴的な項目を示したので、それぞれの生徒をイメージしながら、中学校や高校の生徒の現状を把握し、効果的に働きかけられる取組に役立ててもらいたい。

ア 学年ごとの「高校生活を満足させる」特徴的な要因

- (1 学年) ・ 中学校の友人関係が良好であった。
・ 入学した高校は希望した学校であった。
・ 高校の友人のことで悩みや心配がない。
・ 自分の性格に悩みや心配がない。
- (2 学年) ・ 中学校のクラスで自己存在感があった。
・ 高校での学習意欲が高い。
- (3 学年) ・ 高校は将来のためにと実感している。

イ 課程・学科ごとの「高校生活を満足させる」特徴的な要因

- (全日制・普通科) ・ 中学校の友人関係が良好であった。
・ 入学した高校は希望した学校である。
・ 高校の友人関係が良好である。
・ 高校での自己存在感がある。
・ 高校の部活動での自己存在感がある。
- (全日制・専門学科) ・ 高校での友人関係が良好である。
・ 高校での自己存在感がある。
- (全日制・総合学科) ・ 中学校での教師との関係が良好であった。
- (定時制) ・ 高校の部活動での自己存在感がある。

ウ 性別ごとの「高校生活を満足させる」特徴的な要因

- (男子) ・ 中学校の学校生活に満足していた。
・ 中学校の友人関係が良好であった。
・ 入学した高校は希望した学校である。
・ 高校の部活動での自己存在感がある。
- (女子) ・ 高校での学習意欲がある。

3 中途退学を未然に防ぐための3つの手立て

各種調査結果から、中途退学の未然防止のためには、学校生活を満足させる取組が重要であることがわかった。

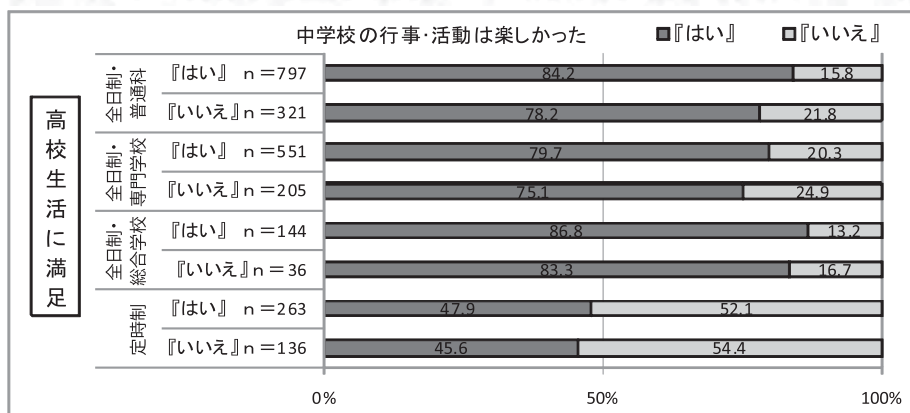
そのための手立てとして、「クラスの中で、生徒一人一人の自己存在感や自己肯定感を高める取組」や「教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組」、「将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組」が必要であると考えられる。

I クラスの中で、生徒一人一人の自己存在感や自己肯定感を高める取組

様々な教育活動を通して「居場所づくりの場」を提供し、生徒には、主体的に取り組める活動を通して「自己存在感」や「自己肯定感」を育てることが大切である。

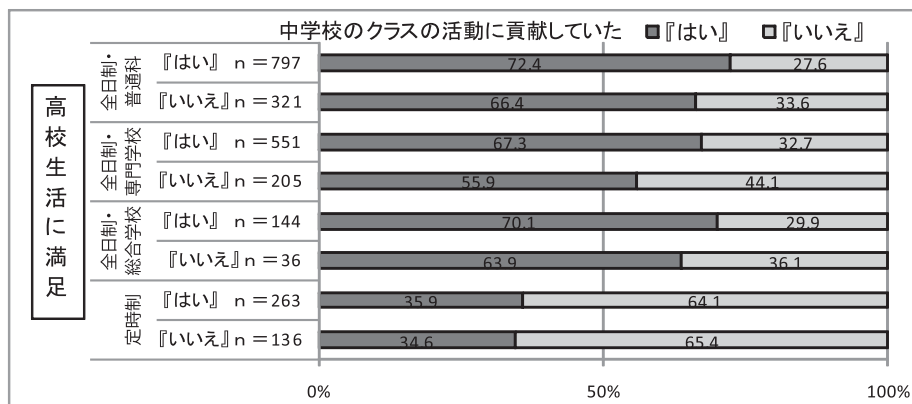
① 「中学校の行事・活動は楽しかった」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・普通科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（797人）のうち、84.2%が「中学校の行事・活動は楽しかった」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（321人）の78.2%と比較して、6.0ポイントの開きがあった。



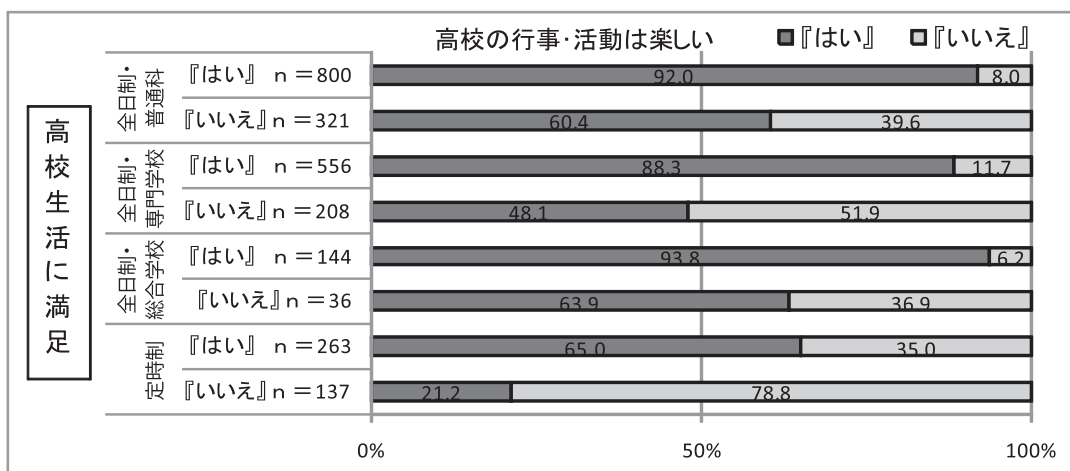
② 「中学校のクラスの活動に貢献していた」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・専門学科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（551人）のうち、67.3%が「中学校のクラスの活動に貢献していた」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（205人）の55.9%と比較して、11.4ポイントの開きがあった。



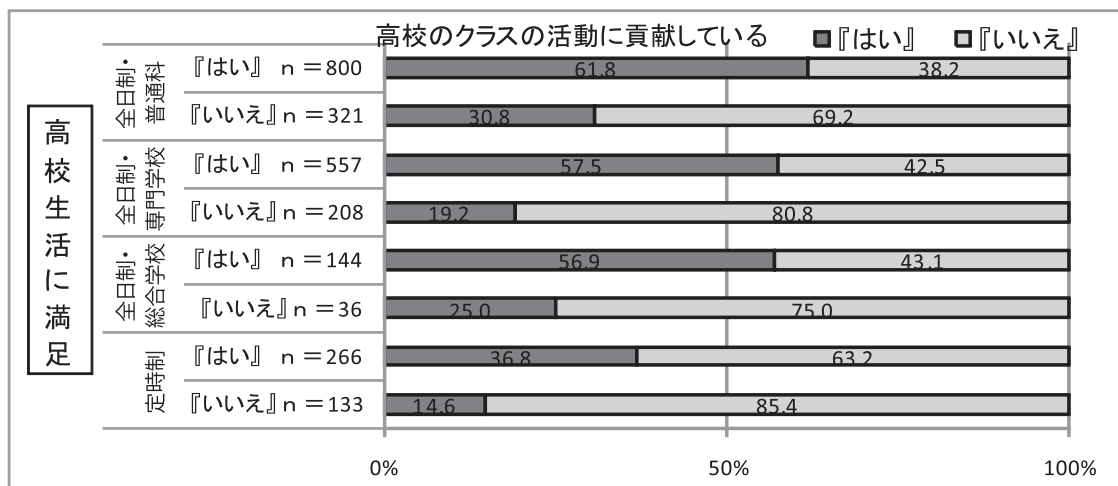
- ③ 「高校の行事・活動は楽しい」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・総合学科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（144人）のうち、93.8%が「高校の行事・活動は楽しい」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（36人）の63.9%と比較して、29.9ポイントの開きがあった。



- ④ 「高校のクラスの活動に貢献している」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、定時制の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（266人）のうち、36.8%が「高校のクラスの活動に貢献している」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（133人）の14.6%と比較して、22.2ポイントの開きがあった。



事例1 構成的グループエンカウンターを活用した不安の軽減と自己肯定感を高める取組によって高校生活への適応を目指す(中学校)

【キーワード】 希望や不安の共有、成長の振り返り、仲間からの肯定的な評価、自信

「次のライフステージへ進もう」



Part 1 「希望も不安も分かちあおう」

Part 2 「中学校生活の振り返り ～成長した自分～」

Part 1 「希望も不安も分かちあおう」

目 的	希望や不安を共有することで不安を軽減する。
内 容	・ 反復法で「高校でしたいこと」 ・ 付箋記入及びKJ法で「高校生活ここが不安」
実施の時期・場	高校入試が始まる前の12月に実施する。または、私立高校の受験が終了し、県立高校の受験前である1月下旬～2月上旬に実施する。(1時間扱い)
取組のポイント	・ 入試の先にある高校生活に思いをはせるよう最初に伝える。 ・ 誰もが不安を抱えていることに気づかせる。
事後の支援	不安感の強い生徒に対しては個別に面談し、場合によって面談を継続する。

進め方

1 ねらいの確認

2 「高校でしたいこと」

- ・ 2人組になり「高校でしたいこと」を2分間思い付くままに言い合う。
- ・ 「高校でしたいこと」を10個書き出しランキングする。

□準備物

- ・ 「入試は誰も不安で心配だと思うが、試験だけを考えているとその後が見えない。希望校に受かったとして、そこで何がやりたいのか。高校生活で心配されることは何かを今日は出し合ってみよう」と投げかける。

- ・ 機械的に2人組を作る。集団の状況によっては総合わせカードなどで意図的に作る。
- ・ 2分間、したいことを取捨選択せずに次々にたくさん言うよう指示する。
- ・ 相手が言ったことも参考にしてよいこと、新たに思い付くことも書いてよいことを伝える。

□・ストップウォッチ ・記入用紙

3 「高校生活ここが不安」

- ・ 4人グループを作る。
- ・ 個人作業で5分間、高校生活で不安に思うことを一枚の付箋に一つ、できるだけたくさん書く。
- ・ 台紙に付箋を並べてグルーピングし、小見出しを付ける。
- ・ 解決策が考えられるものは、台紙に書き込む。

- ・ 4人グループを作り、挨拶して始める。
 - ・ やり方を説明する。
 - ・ 例を挙げ、ささいな内容でよいこと、ちょっとしたでも気にかかることでよいことを伝え、たくさん書くよう指示する。
 - ・ KJ法でグルーピングする。
 - ・ 解決策が思い付かないものはそのままにし、事後教師が答える。
 - ・ 挨拶して終わる。
- ・付箋 ・台紙 ・マジック

4 高校生活で困ったときの対応についての話し合い

- ・ 誰も気になることや不安を持っていることを確認し、「困ったときどうしたらよいか」と投げかける。

5 活動の振り返り

- ・ 振り返りシートを記入する。
- ・ 感想を言う。

- ・ 時間によって振り返りシートは帰りの会で記入することにし、感想を数人に発表させる。
- 振り返りシート

年 月 日 ()

3年 組 番氏名 _____

高校でしたいことベスト10

高校でしたいこと	ランキング

〈やり方〉

- ① 高校でしたいことを10個書く。
- ② 書きだしたものをやりたい順にランキングして1～10の番号をつける。

【別紙資料1】ふりかえり用紙 年 月 日

3年 組 番氏名 _____

「希望も不安も分かちあおう」

- 1 今日の活動は楽しかったですか。




とても楽しかった	少し楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
_____	_____	_____	_____
- 2 「高校でしたいこと」では、したいことがたくさん思いつきましたか。

たくさん思いついた	まあまあ思いついた	少し思いついた	思いつかなかった
_____	_____	_____	_____
- 3 「高校生活ここが不安」では、不安に思うことや気にかかることをたくさん書くことができましたか。

たくさん書けた	まあまあ書けた	あまり書けなかった	書けなかった
_____	_____	_____	_____
- 4 「高校生活ここが不安」では、メンバーも自分と同じような不安や気がかりなことを思っていましたか。

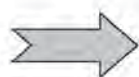
ほとんど同じだった	同じことが多かった	いくつか同じだった	ほとんど違っていった
_____	_____	_____	_____
- 5 今日の活動をやった感じたこと、気づいたこと、考えたことなどを自由に書いてください。

Part 2 「 中学校生活の振り返り ～成長した自分～」

目 的	中学校3年間の成長をふり返ったり、仲間からの肯定的な評価を得たりして自己肯定感を高める。
内 容	<p>活動1 ・「足し算トーク」で中学校生活の振り返り </p> <p>・自分の成長をワークシートに書き出して確認</p> <p>活動2 ・「私は〇〇さんの～が好きです」でよさの伝え合い </p> <p>・自分のキャッチコピーの作成</p>
実施の時期・場	2月中旬～下旬に実施する 活動1、活動2それぞれ1時間扱い、計2時間扱い  活動1と活動2を続けて実施してもよい
取組のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめに話しやすい雰囲気をつくる。 ・「好き」とはどのようなことかを確認し、幅広く捉えさせる。 ・自分を卑下することなく、素直に受け取るよう伝える。
事後の支援	3年間の生活をふり返ることができても自信に結び付かない生徒や他人から見た自分を素直に受け入れられない生徒に対しても面談をして、その生徒の成長を支持したり教師から見たよさを改めて伝えたりして支援する。

アレンジ 

- 「足し算トーク」は、グループのメンバーが同じお題で話すことに特徴がある。
- 「すごろくトーク」「サイコロトーク」のように一人一人が違うお題で話してもよい。
- クラス人数分のお題を作り一人ずつ引いて話し、全員で聞く。



- 「私は〇〇さんの～が好きです」は、記入用紙を準備し、書いたものを交換し合ってもよい。



- 活動1の「3」「4」、活動2の「2」「3」を4回に分けて、帰りの会等を利用して実施する。

活動1の進め方

□準備物

1 ねらいの確認

- 「卒業を前に3年間の成長した自分を確認し自信をもってそれぞれの進路に踏み出そう」と投げかける。

2 あいこジャンケン(2分)

- 出会った人とあいこになるまでジャンケンをする。
- あいこになったらハイタッチをして別れる。
- 別の人と同様に繰り返す。

- 自由に歩けるスペースを設ける。
- ウォーミングアップとして実施し、話しやすい明るい雰囲気を作る。
- グー=0、人差し指1本=1、人差し指と中指2本=2、順に…3、4、指5本=5の6通りのジャンケンを絵カードで掲示する。
- 出し方を練習してから始める。

□・ストップウォッチ ・指カード

3 「足し算トーク」(20分)

- 6種類のジャンケンをし、全員の出した数を合計する。
- その数の「お題」で一人ずつ順に話をする。
- 全員が話し終わったら、同様に繰り返す。同じ数ならやり直す。

- 4人グループを作り、挨拶して始める。
- やり方とルールを説明する。
- 〈話すルール〉
 - みんなと同じくらい話す。
 - 1番目に話す人を変えながら順番に話す。

〈聞くルール〉

- 話が終わるまで黙って聞く。
- タイミングよくうなづく。あいづちを打つ。
- 聞いた後に短く感想を言う。

- 挨拶して終わる。

□・お題カード(グループ数分)

- 話す・聞くのルール一覧

4 ワークシート記入

- 中学校生活を振り返り、自分の成長を吹き出しに書く。

- 3で話したことや友達の話を聞いて思い出したことなどを太線の吹き出しに書く。

□・ワークシート(人数分)

5 活動の振り返り

- グループで感想を言う。

- この活動を行って感じたこと思ったことを3のグループでフリートークする。全体で共有したいことを発表する。

合計数		お題
0		・学校で1番好きな場所とその理由
1		・遊星や宇宙、移住旅行での1番の思い出
2		・入学したとき感じたこの中学校の印象を話す
3		・1番がんばった学校行事は何で、どんなことから話す
4		・体育祭や合唱コンクールなどの学校行事の練習で苦労した話
5		・1番好きな教科とその理由
6		・授業中の宿題でがんばったこと、授業中の時を話す
7		・体育のメニューで好きなメニューを話す
8		・好きだった部活動、その時の仕事でがんばったことも話す
9		・3年間の中学校生活でうれしかったことを2〜3つ話す
10		・この3年間で、できるよくなったことを2〜3つ話す
11		・若く感じたこと、克服したこと
12		・宿題や勉強でがんばったことや時期と得意な科目
13		・下宿生が奨励したこと、その時の下宿生の様子を話す
14		・1学期に転校にされたこと、その時の気持ちを話す
15		・美術や技術、家庭の授業で習ったお題に人々の価値について話す
16		・部活の思い出(練習で苦労した話、うれしかったことなど)
17		・友達に言われてうれしかった言葉、その時の場面を話す
18		・先生に言われてうれしかった言葉、その時の場面を話す
19		・この3年間で、自分ががんばったこと(がんばっていること)
20		・3年間の時のハイキング(忘れられないできごと)

活動2の進め方

1 ねらいの確認

2 「私は〇〇さんの～が好き です」

- ・ 二重円になり、向かい合った人とペアになる。
- ・ ペアの相手の好きなところを「私は〇〇さんの～が好きです」と文例を示し、交代で1分間たくさん言い合う。
- ・ 円の外側が時計回りに1人分動いてペアを代える。
- ・ 新しいペアと同様に繰り返す。
- ・ 最初に戻ったら終わりにする。

3 ワークシート記入

- ・ 吹き出しに、言われたことを思い出して書く。
- ・ 自分の成長やよさを総合的に考えて、自分のキャッチコピーを雲形の吹き出しに書く。

4 活動の振り返り

- ・ 振り返りシートを記入する。
- ・ 感想を言う。

※ 今回の取組を通して、自己肯定感が高まり、4月からの高校生活に自信をもって臨めるようになる。

□準備物

- ・ 「3年間の中学校生活を振り返り自分の成長を確認した前時に引き続き、今日は自分のよさを確認し、かけがえのない自分に自信を持とう」と投げかける。

- ・ 「好き」とはどういう事かを確認する。

〔よい・好ましいと思うこと、尊敬すること、
すごいと思うこと、まねしたいと思うこと、
上手・優れていると思うこと、etc〕

- ・ 誰も誰に対しても「好き」「苦手」の両面ある。「苦手」があることは悪いことではない。ただ、「好き」を見つけていくことが良好な人間関係のコツであることに簡単に触れる。

- ・ 教師がデモンストレーションする。

4人程度の生徒が円になって座り、教師は外側に座り向かい合った生徒のよいところ（好き）を1つ言う。生徒も教師のよいところ（好き）を1つ言う。教師が動いて全員の生徒とやる。他の生徒にはカードに書いて渡す。

- ・ 伝える相手に体を向けて顔を見ながら言うこと、言われた者は「ありがとう」等、御礼を言うこと（リアクション）を指示する。

- ・ 自分を引き下げず素直に喜ぶことを伝える。

- ・ 「私は〇〇さんの～が好きです」の表示カード
- ・ ストップウォッチ

- ・ 吹き出しに友達から言われた自分のよさを記入する。

- ・ キャッチコピーの説明をする。

- ・ 作るのが難しい生徒には、ワークシートに書いてある言葉を活用させる。

- ・ 前活動で使用したワークシート

- ・ 時間によってふり
返りシートは帰りの
会に記入し、感想を
数人に発言させる。

- ・ 振り返りシート

中学校生活の振り返りシート

「中学校生活の振り返り ～成長した自分～」

1. 今日の活動を通して感じたこと

2. 振り返りシートでは、3年間の中学校生活を思い出しましたか

3. 「みんなか〜が好きです」では、友達のことから何を感じましたか

4. 「みんなか〜が好きです」では、自分か〜を思い出して友達か〜を伝えましたか

5. 今回の活動を通して感じたこと、気づいたこと、考えたことなどを自由に書いてください

事例2 「夢いっぱい、花いっぱい運動」の取組を通して、生徒一人一人が夢を持ち、卒業後の進路実現を目指す（高等学校）

【キーワード】 学習環境の改善、美化意識の向上、夢を持つ、進路実現

目 的	○ 『夢花壇』の制作を通じた学校環境の改善と、生徒一人一人の自己存在感や自己肯定感の醸成を目指す。
内 容	○ 学校祭での完成披露に向け、保護者の協力をいただきながら、教員と生徒が心を一にして花壇づくりに共に汗を流した。 また、各クラスの美化委員が、毎日の清掃時に水やりや季節ごとに新しい花を植えるなど、継続的な取組を行っている。
実施の時期・場	○ 学校行事である学校祭（11月）の成功に向け、「事前準備」から「事後評価」まで見据えた計画的な取組を展開した。
取組のポイント	○ 学校行事への積極的な参加を通して、「自分は人から必要とされている」ことや「自分の学校を誇りに思える」ことを実感させる。

○取組事例

1 本校では残念なことに、校舎内でのガムの吐き捨て、教室棟から中庭へのゴミの投げ捨てが頻繁にあり、校舎内外の環境は決して良好な状態とは言えなかった。

その背景として、生徒の中には自分に自信が持てず、他人からも必要とされる経験が少ないなどの理由から、自分が好きになれず、ましてや他人のことや学校のことが好きになれない生徒がおり、安易にゴミの投げ捨て行為に至ってしまうことが考えられた。

2 そこで、生徒の発案により、生徒会の美化委員が中心となった「夢いっぱい花いっぱい運動」を展開し、教員と生徒、保護者が一致協力して『夢花壇』を制作することとなった。

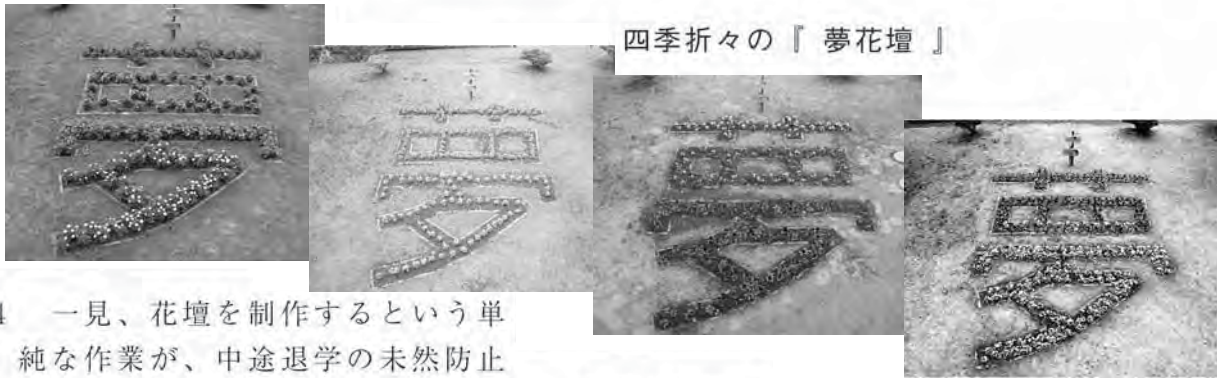


『夢花壇』制作の様子

- 3 『夢花壇』の完成後は、教室棟から中庭へのゴミの投げ捨ては激減した。また、生徒たちの美化意識を継続させるため大掃除を毎月実施したところ、校舎内のガムの吐き捨てなどもほとんどなくなり学習環境が大きく改善された。

今回の取組を通して、生徒一人一人に自分のよさを実感させることができ、自己存在感、自己肯定感を高める結果となった。

また、生徒の自己存在感や自己肯定感を高めることが、夢をもち続け進路実現に向け前向きに努力する意欲を引き出すことに一定の効果が認められた。



- 4 一見、花壇を制作するという単純な作業が、中途退学の未然防止の一助になるとは考えもしなかったが、今回の取組により、どのような教育活動においても、教員一人一人が、生徒にとって今何が必要で、どのような生徒であってほしいかを意識化することで、その効果は何倍、何十倍のものになることを実感した。

さらには、生徒一人一人が夢をもち、卒業後の進路実現を目指すためには、学校生活を生き生きと送れる環境作りを生徒とともに進めていくことが生徒の自己実現への近道となると考える。

その際、生徒に夢を語るには、教師自身が夢をもち続けたいものである。

今後とも、四季折々の花で生徒たちの心を癒し、心が和む学校環境を維持していきたい。

あんなことしたい
こんなことしたい
あんなふうになりたい
こんなふうになりたい
若いとき 夢いっぱい
年をとっても 夢いっぱい
夢の実現にむけて
今 夢中になって 汗かいて



PTAだより『夢花壇』による
保護者への周知（一部引用）

生徒が制作した『夢花壇』の看板

事例3 中学校との連携を深め、適応指導の強化による「居が
いのある学校・学級づくり」を目指す（高等学校）

【キーワード】 中学校との連携、適応指導

<p>目 的</p>	<p>○ 未知の高校に対し不安をもつ新入生もいることを踏まえたとき、中学校との連携は重要である。本地区では、地区県立学校生徒指導連絡協議会において、合格発表が終了した毎年度末期に、中学校の生徒指導主事に参加してもらい、情報交換会を行っている。ここで得られた情報を、入学後に生かすことを目的とした。</p>
<p>内 容</p>	<p>○ 生徒指導部と学年部間の連携を強め、新入生情報の情報を的確に把握し、必要に応じて教頭を窓口として中学校との間でさらに情報交換を行うなど、配慮を十分に行う。</p> <p>○ 入学後は、可能な限り早期に生徒との面談を実施し、生徒理解に努める。特に、中学校で不登校を経験した生徒が、5月の連休明けに不適応を示す傾向があることに着目し、生徒の変化の有無に留意する。</p> <p>○ 1学期中間試験終了後を目途として、1学年担任による地区内全中学校訪問を実施し、高校での生活状況を報告するなどして、相互に情報交換を行う。</p>
<p>実施の時期・場</p>	<p>○ 配慮を要する生徒に関する情報収集 前年度3月後半 地区生徒指導連絡協議会</p> <p>○ 新学年担任への情報伝達 前年度3月末 新学年担任による学年会</p> <p>○ 個人面談の実施 4月中旬 昼休み及び放課後等を活用した個人面談 (2～3学期当初も同様)</p> <p>○ 学年会による情報交換 5月中旬 連休明けの生徒の状況に関する情報交換</p> <p>○ 中学校訪問 5月下旬 地区内中学校・卒業学年担当者との情報交換</p>
<p>取組のポイント</p>	<p>○ 個人情報の取扱いには十分に配慮する。</p>

○取組事例

- 1 本校の場合、中途退学にいたる主な要因は、「不登校」がそのほとんどを占める。しかしながら、不登校生徒のうち、学校内での人間関係に起因するケースは1～2例程度であり、不安障害等の個人的な要因によるケースが多数を占め、望ましい集団づくりに一定の効果があったと考えられる。
- 2 5月の連休明けや夏休み明けなど、生徒の変化しやすい時期に、学年全体で生徒をケアしようとする雰囲気づくりができた。また学校行事への参加意欲が高まるなど、副次的な効果があった。
- 3 現在は地区内中学校との連携強化に努めているが、隣接県から通学する生徒や他地区出身生徒も少数ながらおり、事前の情報把握をどの程度まで行うべきかは大きな課題である。

- 4 集団づくりを強化するため、入学直後にホームルームの時間を活用し、町内の公園で「交流会」を実施しているが、さらに「仲間意識」を強固にするため、クラス単位での合宿など学年行事の見直しを図る必要がある。



新しい仲間づくりのための「交流会」

- 5 不登校に限ったことではないが、問題行動等への未然防止への対応を着実にやっていくこと、とりわけ高校入学後に新しい環境に適応させる取組を行うことが、結果として、不登校を減少させ、中途退学を未然に防ぐ取組につながるものと考えている。

事例4 ジュニア・キャリアアドバイザー事業を活用した自尊
感情の醸成（高等学校）

【キーワード】教える、自然体験活動

<p>目 的</p>	<p>○ 生徒自らがこれまでに身に付けた知識や経験を、小・中学生に伝える活動を通して、「自分にも何かができる」、「人から必要とされる」体験をさせたい。また、小・中学生に「教える」ことにより、生徒一人一人の責任感、自立心、達成感を芽生えさせるとともに、指導の準備から実施、事後の評価にいたる創意工夫した取組を通して、生徒に生きる力を醸成する機会とする。 さらに、外部に生徒の活躍を発信し、生徒の自尊感情の醸成を図る。</p>
<p>内 容</p>	<p>○ 小学生、中学生向けの自然体験活動（川遊び体験プロジェクト）等を、高校生が主体となって指導していく。また、小・中学生の保護者の参加も可能とする。 ○ 参加者の募集規模が小学生から中学生までと広範なため、実施内容を数年毎に入れ替えて行うこととする。結果として、活動自体が学校のPR活動にもつながり、将来的には目的意識を持った生徒の入学も期待される。 ○ 教員は地域への参加者募集の依頼のほか、安全に最大限配慮する。 ○ 外部に対しても、生徒の活躍をできるだけ発信する。</p>
<p>実施の時期・場</p>	<p>○ 夏休み等を利用して、1～2日で集中的に実施する。あるいは、土・日を利用して年3回程度実施する。自然環境を利用する場合は、実施内容に応じて計画的に実施する。</p>
<p>取組のポイント</p>	<p>○ 小・中学校の児童生徒への全体指導は教員が行うが、個別指導は生徒自身に役割や責任を与えることで、主体性が育まれるように工夫する。また、教員は、生徒が小・中学生に対して分かりやすく教えているかを見守り、必要に応じて援助する。 ○ 生徒への実施前指導が非常に重要で、指導内容の生徒自身の習得状況を見極めることが必須条件となる。 ○ 活動の様子はカメラやビデオカメラ等で記録し、事後の反省等に活用する。</p>

○取組事例

活動内容	指導上の工夫・留意点等
1 事前準備	<p>前提条件として、指導者である高校生自身が確実に実施できる内容であること。安全面への配慮を含めた児童生徒への指導の実際について、詳細な共通理解とシミュレーションが事前に必要となる。特に、自然環境を活用する場合、現地状況の緻密な事前確認が大切である。</p>
2 活動の実施	<p>【実施事例】 川遊び体験プロジェクト (1日目) 講義：川について知ろう（川についての基礎知識） ・川を利用したレジャーの楽しみ方 ・川の危険性についてなど 体験：川遊び体験（自然の川に流されてみよう） ・ライフジャケットを着て川の流れて身を委ねる。 ・高校生は、小中学生に流され方の指導を行い、教員は安全に進行していることを確認する。</p> <p>(2日目) ものづくり：簡易網を作ろう ・塩化ビニル管と樹脂製ネットで簡易網を作製させる。 体験：手製網で川の生き物を採集しよう ・自分で作った網をもって、近くの水路に生物採集に行く。 ・採集した生物について活動メモに記録させる。生物の特徴や生息環境などに関して生徒が指導及び取りまとめを行う。</p>
3 事後活動	<p>参加した児童生徒を対象に、事後のアンケート調査を実施する。結果については、生徒が集計し、事後の反省会で生徒たちに評価をさせる。教員は反省会を見守り、必要に応じて助言を行う。</p>



生徒による川の講義の様子



一列になって流される



簡易網の作り方指導



用水路に出て生物採集



採集した生物について解説



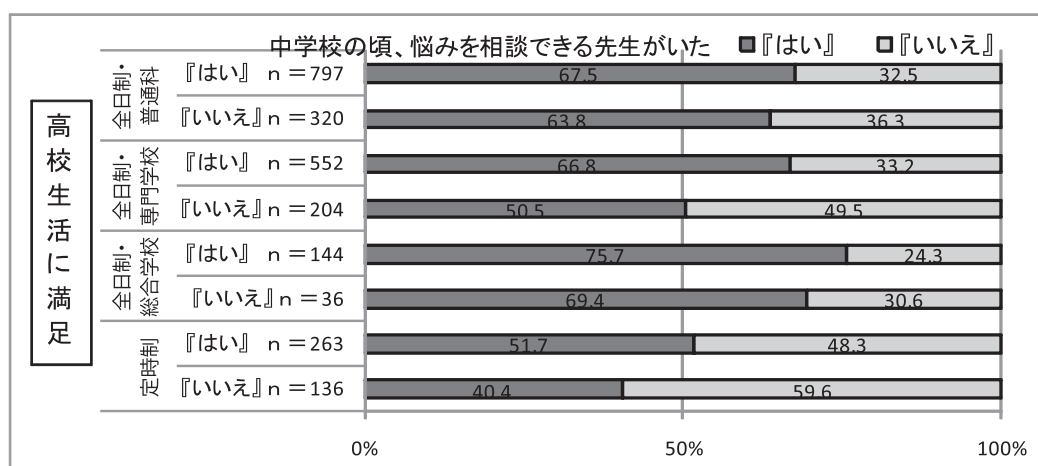
事後のアンケート調査

Ⅱ 教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組

様々な教育活動を通して「絆づくりの場」を提供し、生徒には、主体的・共同的な活動を通して、望ましい人間関係を構築する能力を育てることが大切である。

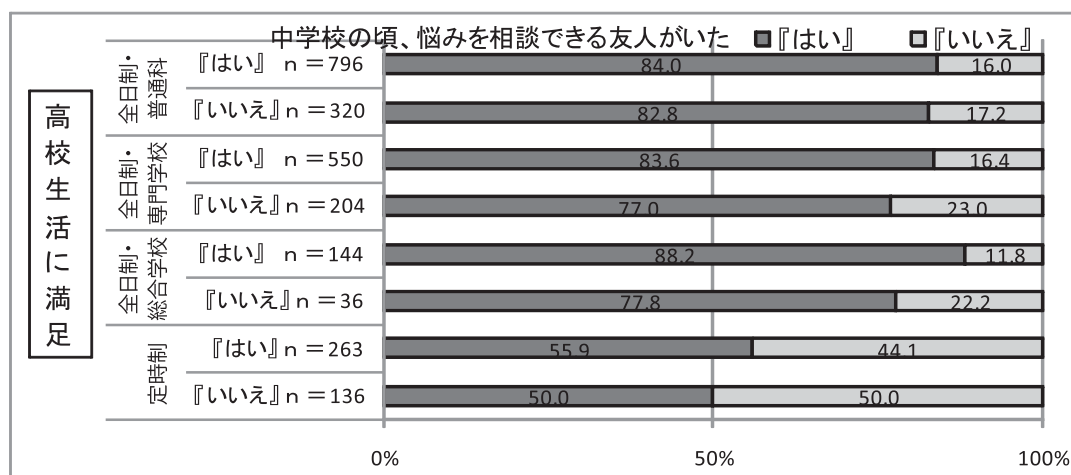
- ① 「中学校の頃、悩みを相談できる先生がいた」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・専門学科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（552人）のうち、66.8%が「中学校の頃、悩みを相談できる先生がいた」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（204人）の50.5%と比較して、16.3ポイントの開きがあった。



- ② 「中学校の頃、悩みを相談できる友人がいた」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

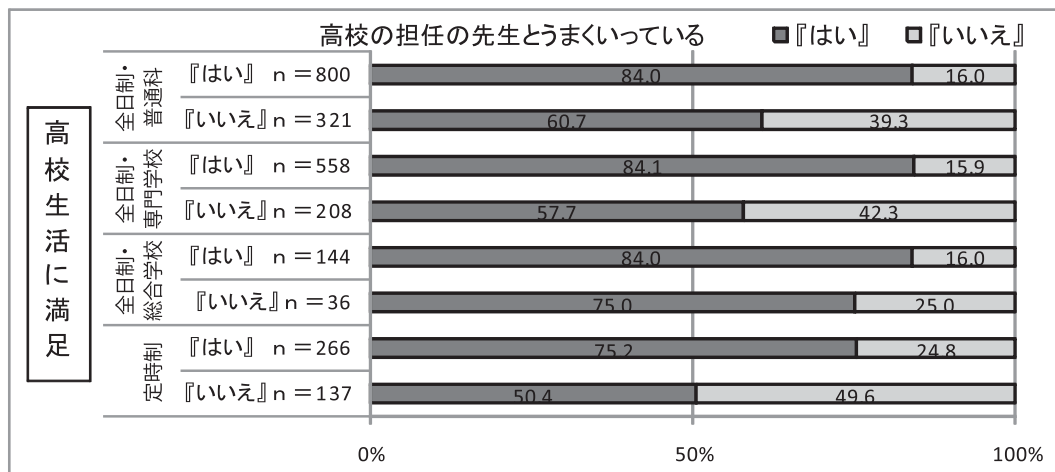
例えば、全日制・総合学科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（144人）のうち、88.2%が「中学校の頃、悩みを相談できる友人がいた」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（36人）の77.8%と比較して、10.4ポイントの開きがあった。



教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組

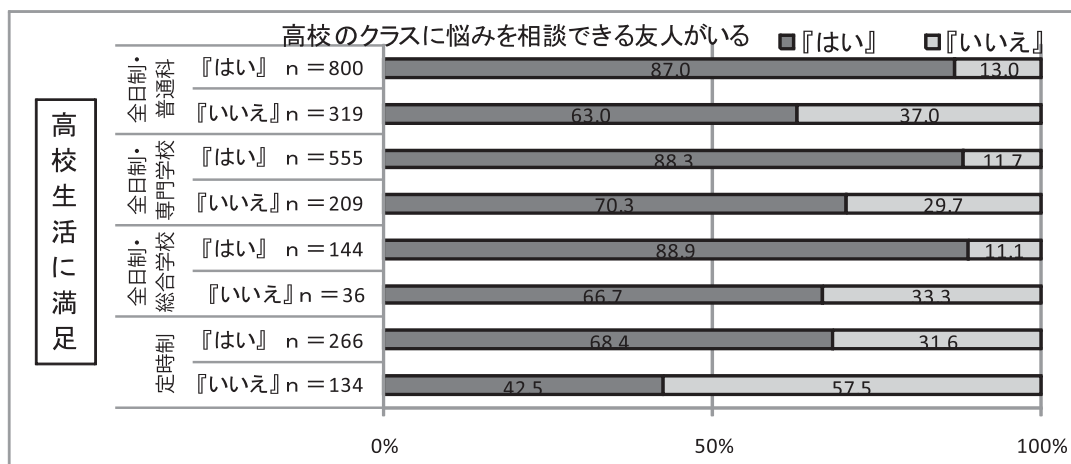
- ③ 「高校の担任の先生とうまくいっている」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・普通科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（800人）のうち、84.0%が「高校の担任の先生とうまくいっている」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（321人）の60.7%と比較して、23.3ポイントの開きがあった。



- ④ 「高校のクラスに悩みを相談できる友人がいる」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、定時制の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（266人）のうち、68.4%が「高校のクラスに悩みを相談できる友人がいる」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（134人）の42.5%と比較して、25.9ポイントの開きがあった。



事例5 生徒理解の質的向上を目指した校内体制づくりと実践 (中学校)

【キーワード】 教職員の共通理解、体制づくり、生徒理解

目 的	○ 生徒の実態を的確に把握し、きめ細やかな生徒指導、学級経営の充実を目指し、教育活動の質的向上を図る。
内 容	○ 全教職員に周知を図るための取組 ・生徒への関わりについての校内研修・情報の共有 等 ○ 担任や学年を中心とした取組 ・記録の共有、各種検査やアンケートの実施 ・教育相談の実施 等
実施の時期・場	○ 4月の校内研修、諸検査やアンケート実施後の研修(適時) ・定期的な情報の共有のための時間割への位置付け 等
取組のポイント	○ 全校体制で取り組むための職員の共通理解やシステムづくり

教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組

1 全教職員に周知を図るための取組

(1) 生徒への関わりについて校内研修の実施

- 『教師のソーシャルスキル』、『授業に生かすカウンセリング』、『学習支援のための生徒理解』についての研修
年度初めから、授業づくり、よりよい関係づくりを推進することをねらいとする。

(2) 中学校の決まりや一日の生活等についての確認

- 生徒の基本的な生活習慣、規範意識の向上を目指し、生徒や保護者への周知と共通理解
『〇〇中学校の決まり』、『〇〇中学校の一日の生活』『学年だより』『学校だより』
『生徒指導だより』

(3) 情報交換のシステムづくり（情報の共有化）

- 定期的な情報交換ができる場の設定
 - ・ 時間割の中に、校内生徒指導委員会を位置付け、情報交換の場とする。
 - ・ 各学年の状況報告や対応策について検討する。また、話し合った内容を各学年部会で学年の生徒指導担当が伝える。
- (メンバー)
 - 教務主任、生徒指導主事、学習指導主任、各学年の生徒指導担当、部活動担当、養護教諭、不登校担当教諭

2 担任や学年を中心とした主な取組

(1) 不登校を未然に防ぐために

- 不登校の未然防止と対応
 - ・ 欠席連絡のない生徒には、家庭に確認する。欠席が続く生徒には、家庭訪問や電話連絡を実施する。
 - ・ 不登校対策委員会を定期的開催し、具体的な対応策と実践を継続する。

(2) 個人の記録の活用

- 個人の記録を活用
 - ・ 生徒の良いところにも目を向けた累加記録として保管し、生徒理解、教師間の共通理解の資料とする。また、次年度への引き継ぎ資料とする。

(3) Q-U検査等の各種検査やアンケート等の活用

- Q-U検査の結果を生かした、学級経営の充実
 - ・ Q-U検査の結果から、集団づくり、人間関係づくり、信頼関係の確立などのため研修を実施する。

(4) 教育相談の実施

- 教育相談の充実
 - ・ 定期、随時、呼び出し等の教育相談を実施する。生徒理解や問題の早期発見と対応に努める。気になることは、「個人の記録」にも記録し、情報の共有にも努める。

事例6 道徳、特別活動、総合的な学習の時間と関連付けた ソーシャルスキルトレーニングの実践（中学校）

【キーワード】 ソーシャルスキルトレーニング、人間関係づくり、自尊感情の育成

目 的	計画的にソーシャルスキルトレーニングに取り組みさせることで、コミュニケーション能力や自尊感情を育成し、よりよい学校生活を送れるようにする。
内 容	ア 学校生活における基本的な生活習慣の確立 イ 学級経営の中でのグループエンカウンターの実施 ウ 「ソーシャルスキルトレーニング」の実施
実施の時期・場	中学校生活3年間を見通して、道徳、特別活動、総合的な学習の時間に関連付けて実施する。
取組のポイント	話し合いができる雰囲気づくりに心がける。

さわやかスキル活動

授業実践：目標をもった生活を目指して

A中学校では、よりよい人間関係を築くための自尊感情の醸成・育成が課題になっている。生徒指導上でも携帯電話でのトラブルや言葉による仲たがいが原因で問題行動を起こしたり、集団生活に支障をきたりしてしまうことが多い。また、言語に関する能力が十分に身に付いていない生徒が多く、人間関係を作る基本となるべきコミュニケーションがとれない場面が見られる。

これらの問題を解決するため、様々なソーシャルスキルを3年間を通して学ばせ、身に付けさせようと考えた。



1 さわやかスキル強化事項

(1) 学校生活の中で

- ① 「はい」という返事の徹底
- ② 授業中における教師及び生徒間の「さん」「君」付け呼名の徹底
- ③ 「語尾・文末を」はっきりと言うことの徹底

教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組

(2) 学級経営の中でのグループエンカウンターの実施

- ①年度初めの学級づくりでは、発達の段階に即し、グループエンカウンターを実施する。また、同一学年では指導内容を検討しできるだけ同じ内容で実施する。
- ②道徳、学級活動、保護者会のはじめにグループエンカウンターを実施し、親和的な雰囲気づくりに努める。

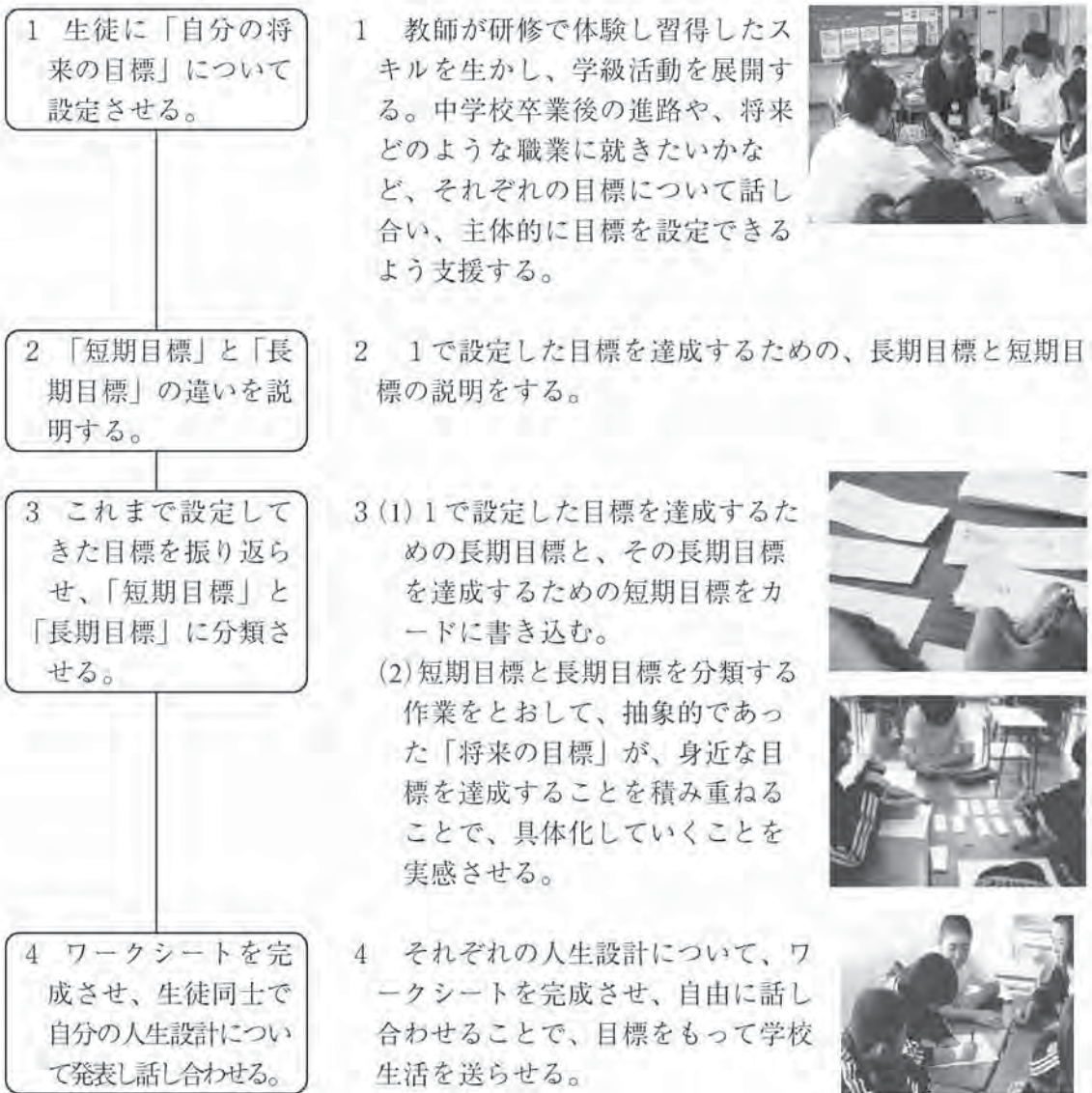
(3) 「ソーシャルスキルトレーニング」の習得と実施

- ①講師を招いての教師のスキルの習得。
- ②道徳、特別活動、総合的な学習の時間と関連付け、年間10時間実施する。

2 実践事例：目標をもった生活を目指して

(1) この授業で行うこと

- ① 生徒に「目標」について定義させる。
- ② 「短期目標」と「長期目標」の違いを説明する。
- ③ 設定してきた目標を振り返らせ、「短期目標」と「長期目標」に分類させる。
- ④ ワークシートを完成させ、生徒同士で自分の人生設計について発表し合わせる。



事例7 学校と保護者とが連携・協力し学習環境の改善を目指した取組（高等学校）

【キーワード】 P T A、授業規律の確立、見守り、家庭の教育力

目 的	○ 授業中や放課後に、校内外を保護者（P T A会員）と教員と一緒に巡回指導を行うことにより、生徒の実態を知り、家庭での指導に生かしていただくことで、より良い学習環境の改善を図る。
内 容	○ 年度当初のP T A理事会において、巡回指導を保護者と教員とで実施することを決定した。その際、校内巡回は1学期には理事全員で行い、2、3学期には各支部会員からの希望者を募った。校外巡回はP T A各支部の育成員全員で行うこととした。
実施の時期・場所	○ 校内巡回は6月以降の週3回、1時限分を割り当てて実施した。校外巡回は9月以降の週1回、放課後に割り当て、駅周辺など生徒が集まりやすい複数箇所で実施した。
取組のポイント	○ 校内巡回の時間帯は1～6時限目を分散して実施し、特定の授業に偏らないように留意した。 ○ 実施前後には職員室に集合し、教員と保護者との懇談及び事後アンケート記入の時間を設けて、より良い学習環境に改善するための参考にした。

教師と生徒、生徒同士の望ましい人間関係を構築する能力を育成する取組

○取組事例

- 1 本校では実施以前から、授業中の生徒の態度にやや落ち着きがなかったり、放課後に校外の店舗や駅周辺などにたむろしたりする事例が見られたため、本校教員が校内外の巡回指導を必要に応じて実施していた。
- 2 保護者（P T A）が教員の巡回指導に全面的に協力するに当たり、特定の役員（理事）のみの参加ではなく、各支部会で仲間同士で声をかけ合い、普段学校に足を運ぶことの少ない会員の方々にも広く参加していただくよう努めた。
- 3 校内外の巡回指導の実施当初は、授業に集中できない生徒が見られたが、数多くの保護者の協力もあり、巡回指導が定着するにつれ学校全体が落ち着いた雰囲気となり、生徒一人一人の学習意欲も高まった。

事例 8 各部の連携による実態把握及び組織的な指導（高等学校）

【キーワード】 学習状況報告会、欠席月 3 日以上 of 生徒の状況調査、別室登校

○学習状況報告会

中心となる部	○ 学習指導部
目的	○ 生徒の些細な変化や困っている様子を共有し、機会を逃さず早期に対応する。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各教科担任が学習状況で特筆すべき事柄について入力する。 ○ 教育相談係が「Q-U」の結果を入力する。特に、学級生活不満足群や非承認群に属している生徒、ソーシャルスキル尺度で配慮の値が低い生徒について記載する。 ○ 教育相談係が各クラスの「Q-U」プロット図をもとに、その位置の意味や効果的な対応の方法について説明を加える。
実施の時期	○ 1、2 学期中間試験後
取組のポイント	○ 学習面や生活面で援助が必要な生徒を総合的に把握するとともに、多くの教職員で生徒に関わるようにする。

○欠席月 3 日以上の調査

中心となる部	○ 教務部、健康指導部（教育相談係）
目的	○ 生徒の些細な変化や困っている様子を早期に発見し機会を逃さず対応する。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 欠席月 3 日以上 of 生徒の氏名、欠席日数、欠席理由を担当が記入する。 ○ 教育相談係は出された情報をもとに担任に確認し、状況の把握や支援の必要性の把握を行う。
実施の時期	○ 毎月
取組のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教務部が実施する出欠統計の用紙を活用する。 ○ 月 3 日 of 欠席が 10 か月になると年間 30 日に達するという意識で教師が「気付く目」をもつことができる。

○別室登校

中心となる部	○ 学習指導部
目的	○ 学力の保障と進路実現に向けた出口の保障を行う。
内容	○ 別室登校の認定委員会を開催する。 ○ 課題学習を中心とした支援計画を作成する。 ○ 2週間ごとに進度を踏まえて課題内容等を更新する。
実施の期間	○ 教室復帰は2か月後を目安にし、期間終了時期に再検討を行う。
取組のポイント	○ 教室復帰を念頭に置く。 ○ 校内の規定に則って認定及び指導を行う。

✂実態把握における留意点✂

- ・既存の取組に付加できるものはその中に取り入れるようにしている。
- ・担任の負担を大きくしない形態にするよう配慮している。

**高等学校での生徒の適応を考える上では
生活面・学習面・進路面のバランスのとれた指導が重要！**



生徒の小さな変化に気付くためには、日頃から、教師が生徒一人一人と向かい合う時間を大切にし、しっかり生徒を見ようとする姿勢が必要である。

しかし、担任一人だけでは限界があるため、欠席状況や各種調査結果等を参考としながら、各部の連携や組織的な指導により、生徒一人一人の悪い面だけでなく、良い面にも光を当てながら対応できるよう、複数の目で見ていく組織での対応が不可欠である。

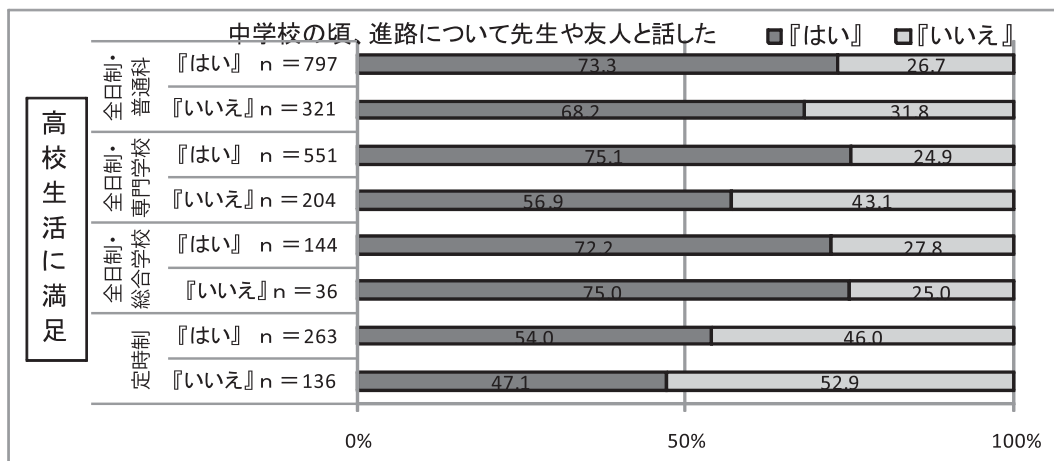
問題が起きてからではなく、日頃から教職員同士の人間関係の構築に努め、いざというときにスムーズに対応できるようにしておきたい。

Ⅲ 将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

様々な教育活動を通して「将来の夢や希望を語れる場」を提供し、生徒には、自己の興味・関心及び適性を生かした進路選択をさせらるような取組を行うことが大切である。

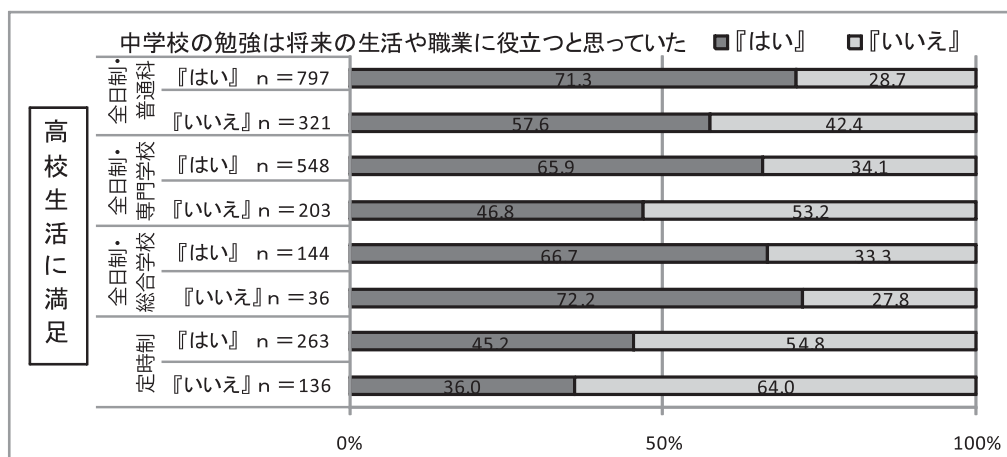
- ① 「中学校の頃、進路について先生や友人と話した」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・専門学科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（551人）のうち、75.1%が「中学校の頃、進路について先生や友人と話した」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（204人）の56.9%と比較して、18.2ポイントの開きがあった。



- ② 「中学校の勉強は将来の生活や職業に役立つと思っていた」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

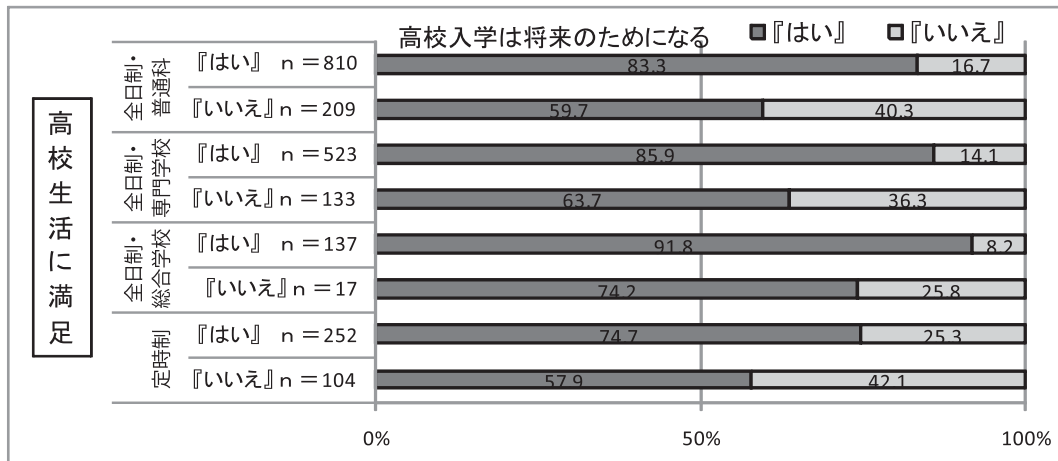
例えば、全日制・普通科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（797人）のうち、71.3%が「中学校の勉強は将来の生活や職業に役立つと思っていた」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（321人）の57.6%と比較して、13.7ポイントの開きがあった。



将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

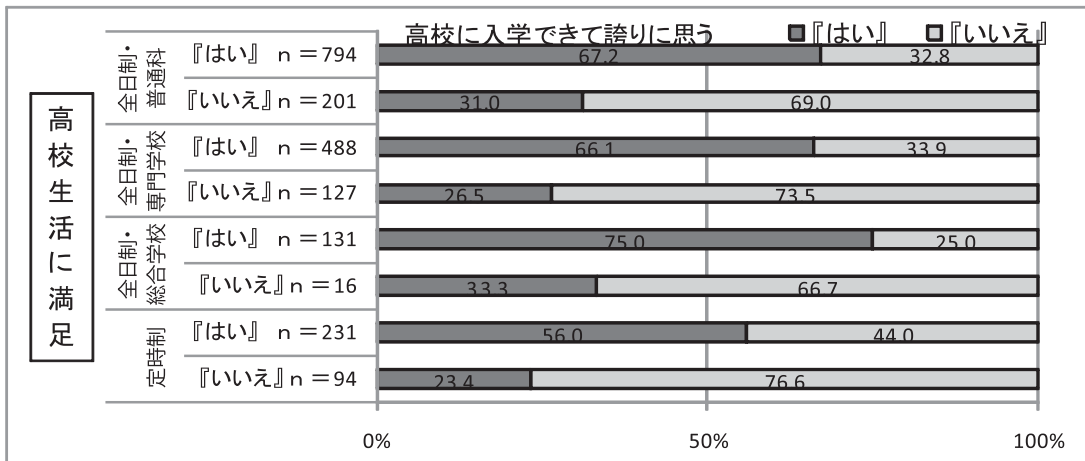
- ③ 「高校入学は将来のためになる」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、全日制・総合学科の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（137人）のうち、91.8%が「高校入学は将来のためになる」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（17人）の74.2%と比較して、17.6ポイントの開きがあった。



- ④ 「高校に入学できて誇りに思う」と回答した生徒ほど、「高校生活に満足している」と回答する傾向がある。

例えば、定時制の「高校生活に満足している・『はい』」と回答した生徒（231人）のうち、56.0%が「高校に入学できて誇りに思う」と回答しており、「高校生活に満足している・『いいえ』」と回答した生徒（94人）の23.4%と比較して、32.6ポイントの開きがあった。



将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

事例9 「卒業後の進路調べ学習」を通して、自己の興味・関心及び適性を生かした進路選択を目指す（中学校）

【キーワード】 情報活用、将来設計、意思決定

目的	○ 正確な進路情報の収集と活用を通し、自己の興味・関心及び適性に応じた進路選択をする自覚を高める。
内容	○ 学級活動の時間を中心とした計画的なキャリア学習（専門高等学校の出前授業を通して）
実施の時期・場	○ 中学2年時、11月
取組のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 専門高等学校教諭をゲストティーチャー、高校生をアシスタントとして「出前授業」を受けることで、自己の進路選択に役立てていこうとする意欲をもたせる。 ○ 高等学校や学科の多様性を理解させ、自己の適性を踏まえた進路を考えさせる。 ○ 身近な先輩の学ぶ姿に触れさせ、自己の学ぶ目標作りにもつなげる。

○具体的な活動プログラム

回	活動内容	キャリア教育からの視点（能力・態度）
1	「自分の進路を考えるために」	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 進路を考えていくために必要とする様々な視点について理解し、主体的な進路選択に向けての考え方やスキルを育む。 <p>【情報収集・探索能力】</p>
2	「出前授業ガイダンス」 「アンケート調査」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出前授業の意義や活動内容等について理解する。 <p>【情報収集・探索能力】</p>
3	道徳 「お前のカワウソが淋しがつているぞ」 内容項目1-(3)責任ある判断	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 自分にも社会にも常に誠実でなければならないことを自覚し、責任をもった行動をとる態度を育成する。 <p>【自他の理解能力】</p>

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

4	「卒業後に学ぶ道①」	◎ 卒業後に自分たちが学ぶ道について理解を広げ、今後の進路選択に向けての意識を高める。 【情報収集・探索能力】
5	「卒業後に学ぶ道②」	◎ 自ら課題をもち、地域の専門高等学校についての調査・理解を広げる。 【情報収集・探索能力】
6	「出前授業」事前指導 コース別学習	○ 自ら課題をもち、積極的に取り組むことの大切さを理解する。 【課題解決能力】
7	「専門高等学校 出前授業」	○ 自己の適性や関心を知ったり、高めたりするための直接体験の場とする。 【自他の理解能力】 ◎ 専門学科の内容について正しい情報を早くから知ることにより、将来の進路選択に具体性や、主体性がもてるようにする。 【情報収集・探索能力】 ○ 高等学校の教員と接することを通して、マナーを身につけるとともに、身近な先輩の姿に触れ学ぶ目標作りにつなげる。 【コミュニケーション能力】
8	「出前授業」事後指導 まとめ	◎ 出前授業を通して得た、専門高等学校の内容や特色をまとめ、進路選択の関心と理解を高める。 【情報収集・探索能力】【選択能力】
9	「卒業後に学ぶ道③」	◎ 進路情報を活用しながら、今の自分にあった高等学校を考え、今後、主体的に進路を選択する意欲を高める。 【情報収集・探索能力】【選択能力】

進路学習については、どこの中学校でも実施していると思うが、高校の教員や卒業生に学校に来て説明してもらうことで、高校生活とはどのようなものであるかを身近に感じられるようになる。

また、どのような生徒であっても、高校に進学することは不安であるため、生徒の不安を少しでも解消し、目標を持たせ、高校への進学意欲を高めることで、中途退学の未然防止にもつながると考える。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

事例10 保護者啓発の取組による三者（生徒・保護者・教員）で考える進路指導を目指す（中学校）

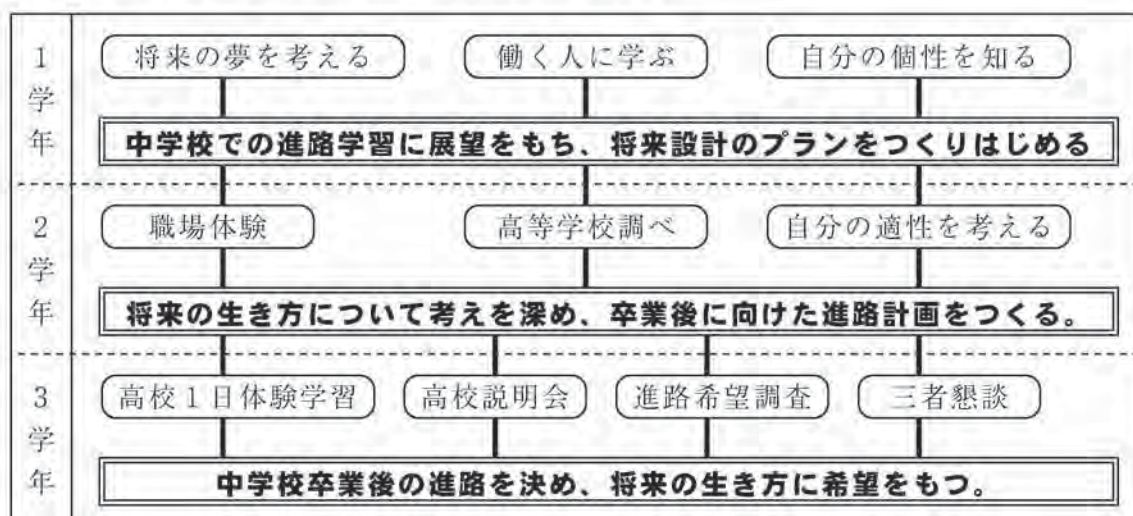
【キーワード】 保護者啓発、保護者会、授業参観、進路だより

目的	○ 中学校3年間の進路学習の見通しをもち、生徒、保護者、教員の三者で進路を考え、生徒の自己実現を図る。
内容	○ 入学当初の「進路だより第1号」により、中学校3年間における進路学習の内容を保護者や生徒に示し、見通しをもたせる。 ○ 1年生の夏季休業前の授業参観、保護者会において、進路学習の授業を公開し、その後の保護者会で改めて自己実現のための3年間の進路学習の系統的な取組を説明する。
実施の時期・場	○ 入学後における「進路だより第1号」 ○ 1年生夏季休業前の授業参観・保護者会
取組のポイント	○ 入学後、保護者と生徒が共に中学校に対する希望、期待、関心が高いうちに説明することで、理解を深めさせる。 ○ 保護者会や三者懇談、家庭訪問等、機会あるごとに、進路の話題に触れ、保護者啓発を行う。

○取組事例

1 「進路だより」による保護者啓発

(1) 中学校3年間の「進路学習」の流れ（第1号）



将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

(2) 進路学習状況（第2号以降）

- ・定期的に「進路だより」を発行し、その時その時の進路学習の状況を伝えるとともに、保護者への啓発内容を盛り込む。

2 授業参観による保護者啓発

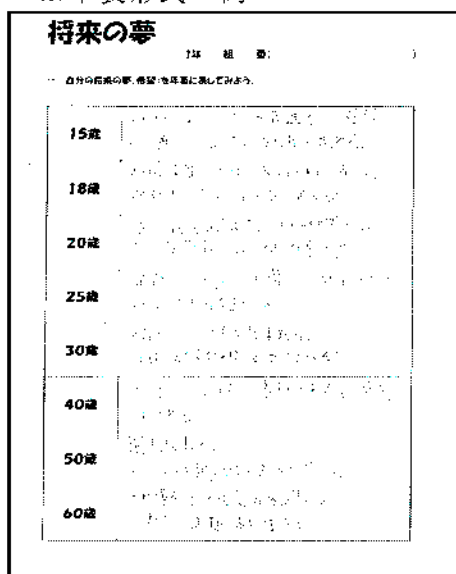
(1) 事前

- ・「将来の夢」を発表するための準備を行う。
準備
- ・生徒一人一人の「将来の夢」発表会原稿を印刷し、学級で冊子にしておく。

(2) 展開

学習活動	留意点
1 本時の活動内容を知る。 「将来の夢」発表会を行う	・ 本時のねらいを保護者にも分かるように説明をする。
2 将来の夢発表会を行う。	・ 1人1分程度の発表とし、全員が行う。
3 将来の夢に向けて、今後の中学校3年間の進路学習について知る。	・ 生徒・保護者が今後の進路学習がどのように展開していくかを共有する。

※年表形式の例



将来の夢をまとめる形式は、年表、4コマ漫画、200字作文等いくつかの幅をもたせ、生徒にまとめやすく、また、発表しやすくなるように配慮する。

(3) 事後

- ・「将来の夢」を実現するためには、どのような方法、道筋があるのかを調べ、中学校3年間の進路学習がどのように関係してくるのかを考える。

保護者を巻き込んだ進路学習は、家庭において卒業後の進路を話し合う際、学校との共通の認識のもとで話をしてもらえるとという大きなメリットがある。今後なるべく多くの保護者に参加してもらい、家庭と連携した進路学習を充実させたい。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

事例11 立志式での決意発表を通して、希望進路実現に向けての意欲を高める取組（中学校）

【キーワード】主体的、自己理解、目的意識、自己決定

目 的	○ 立志式を機会に、自己の希望進路について考え、決意を発表することで、実現に向けての意欲を高める。
内 容	○ 立志式における将来の決意発表
実施の時期・場	○ 中学2年生（立志式 学級活動 職場体験学習）
取組のポイント	○ 主体的に進路学習に取り組ませる。 ○ 様々な進路学習をとおして、自己の適性等を理解させる。 ○ 希望進路の実現のためには、どんな進路選択が必要かを考えさせ、自己決定させる。

○進め方

【事前の活動】

<学級活動>

職業適性テスト

- ・ 学級活動で職業適性テストを実施する。その結果を基に自分を深く見つめ直し、自己理解に役立てる。

<総合的な学習の時間>

働く人との関わり

- ・ 「興味のある職業とその世界で活躍している人」「自分の目標とする人」について調べ学習を行う。その際、自分の進路希望と合わせて考えさせる。

<総合的な学習の時間>

職場体験学習

- ・ 職場で働く様々な人と積極的に関わることで、コミュニケーション能力の育成を図る。また、礼儀や社会のルールを守って行動することの大切さを学ばせるとともに、その経験をこれからの学校生活に生かせるようにする。

<総合的な学習の時間>

職場体験学習
(成果発表会)

- ・ 職場体験学習での活動内容、成果を事業所ごとに発表する。各教室を使い、分科会形式で行う。
- ・ 2学年保護者だけでなく、1学年生徒全員が参観することで、来年度への意識付けを行う。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

【活動内容】

<立志式>

進路講話
将来の決意発表

- ・ 進路学習の一環として、立志式（進路講座）を実施する。2学年主任、進路指導主事が中心となって進行する。

進路講話

- ・ 様々な分野で活躍する方の話を聞き、夢や希望をもって努力することの大切さを学ぶ。
- ・ 講師を依頼するに当たっては、地元にはゆかりがあり、現在活躍している方が選出できるよう、PTAにも協力を依頼する。

将来の決意発表
(2学年全員)

- ・ クラスごとにステージに上がり、一人ずつ決意を発表する。内容は、「将来の夢」と「その夢に近づくために、これからどのように過ごしていくか」を発表する。

【事後の活動】

<学級活動>

記念文集の作成

- ・ 立志式の決意発表を受けて、学級活動で将来の希望について作文にまとめる。その際、現実のものとするため、具体的な進路についても触れて考えさせる。

<学級活動>

高等学校調べ

- ・ 栃木県内高等学校、高等専門学校、産業技術専門校の案内や各校パンフレット、ホームページ等を活用して、高等学校について調べる。各学級内で発表会を行い、情報を共有する。

中学2年生の段階では、中学校卒業後の進路について、まだしっかりとした目的意識をもてず、ただ「みんなが行くから高校に行く」などと安易に考えている場合が多い。しかし、まもなく3年生に進級するこの時期は、本格的に進路を考え始めるころであり、本事例のような立志式での取組は大変効果がある。

将来の決意を人前で発表することで、自分自身と真剣に向き合い、何のために高校へ進学するのか、高校へ入った後はどう過ごすべきかということを、生徒自らが真剣に考えるようになる。また、保護者にも参観してもらうことで、進路について保護者への啓発にもつながり、進路選択の際にスムーズな話し合いができる。

このように、生徒の発達の段階にあった取組を工夫することは、不登校や中途退学の未然防止に大いに役立つと考える。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

事例12 関係機関との連携による不登校生徒への適切な支援 (中学校)

【キーワード】 校内支援体制、市町教育委員会による不登校担当者会議、
関係機関とのケース会議

目 的	○ 不登校生徒の状況に応じ、学校外の関係機関や専門家との連携を図り、個々の生徒が必要としている支援を行う。
内 容	○ 不登校対策委員会を核とした校内支援体制の確立 ○ 市町教育委員会による不登校対策会議 ○ 関係機関とのケース会議
実施の時期・場	○ 校内不登校対策委員会（毎月） ○ 市町教育委員会による不登校対策会議（毎月） ○ 関係機関とのケース会議（必要に応じて）
取組のポイント	○ 生徒指導主事が中心となり、校内不登校対策委員会を開催するなどして校内支援体制を確立した上で、関係機関とのサポート体制をつくり、不登校生徒への適切な支援を行う。

1 校内支援体制の確立

○ 生徒指導部会による情報の共有

毎週、生徒指導部会において、欠席等の状況、学習・生活の様子など不適應生徒の情報を共有して必要な指導・援助を行い、不登校の未然防止、早期発見に努める。

○ 不登校対策委員会を核とした組織的な対応

毎月、不登校対策委員会を実施して不登校生徒への対応について協議し、校内の支援チームを編成して組織的な対応を行う。

(参加者) 校長、教頭、教務主任、生徒指導主事、学年主任、関係教員、
教育相談担当、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、
スクールカウンセラー

- ・不登校生徒の状況把握とアセスメントを行う。
- ・個別の指導・援助計画の作成、評価、変更を行う。その際、関係機関との連携について協議する。
- ・個別の指導・援助計画に基づいて校内の支援チームを編成し、不登校生徒に対して指導・援助を行う。

2 市町教育委員会による不登校対策会議

市町教育委員会では、毎月、不登校対策会議を実施して市内の生徒の不登校状況を把握するとともに、不登校生徒への指導・援助について各学校に助言する。

(参加者) 市町教育委員会指導主事、教育相談員、臨床心理士

- ・各学校が作成した不登校生徒の個別支援票を基に、市内の生徒の不登校状況について把握する。
- ・各学校の不登校生徒への指導・援助に対して助言する。
- ・必要に応じて、臨床心理士への相談、市町適応指導教室への通級を勧める。

3 関係機関とのケース会議

家庭環境の急激な変化や本人の情緒的混乱が大きいなど、学校だけの対応では不登校生徒への指導・援助が難しい場合、学校外の関係機関や専門家と連携して支援を行う。その際、必要に応じて、関係機関とのケース会議を実施して不登校生徒や家庭への支援を行う。

○ 児童虐待が疑われる不登校傾向の生徒について、関係機関とのケース会議を実施し対応した事例

欠席が目立っていた女子生徒Aは、父から暴力を受けていることが分かり、校内不登校対策委員会で協議し、直ちに市町の家庭児童相談室に通告した。要保護児童対策地域協議会主催のケース会議が開かれ、本ケースについての情報を共有し、各関係機関による見守りをしていくことになった。具体的には、家庭児童相談室職員による家庭訪問での状況把握・母への支援、民生委員による近隣住民からの情報の収集、警察による地域巡回の強化を行うことにした。学校では、家庭訪問、Aへの教育相談等を通して、学校への適応を図るよう努めた。

(参加者) 児童相談所職員、市町家庭児童相談室職員、民生委員、警察署員、市町教育委員会指導主事、中学校校長・生徒指導主事・担任

Aは、その後時々欠席したが、学校では友人もでき、高校進学に向けて学習にも意欲的に取り組むようになった。父との関係は依然として良好とはいえないが、暴力は受けなくなった。高校進学後も、Aと妹が要保護児童として、家庭児童相談室職員が継続して家庭訪問を実施している。Aは一時学校を続けて休むことがあったが、学級担任、養護教諭を中心とした学校での丁寧な対応により、再び、登校するようになる。

不登校については、その要因・背景が様々であることから、その対応には、時機を逸することなく、生徒本人のみならず家庭への適切な働きかけや支援が必要である。

しかし、今回の事例のように、学校だけでは対応が難しいことがあるため、関係機関と連携を図りながら、生徒の将来的な社会的自立に向けた取組を一層充実した

事例13 「課題研究」を通した生きる力の醸成（高等学校）

【キーワード】 主体性、継続性、達成感、個別・グループ研究

<p>目 的</p>	<p>○ 「課題研究」は、生きる力に必要とされるあらゆる能力の醸成に役立つ。</p> <p>① あるテーマについて証明するために、どのような方法論をたどれば解決に向かうのか。（計画・立案）</p> <p>② その方法論を実際に試すのに何を留意しなければならないか。（準備・調整・工夫）</p> <p>③ もたらされた結果をどうまとめるのか。（データ処理・分析）</p> <p>④ 得られた結果から何が導かれるのか。（考察・発展）</p> <p>⑤ 以上をどう発表するか（プレゼンテーション）。</p> <p>生徒には、自由な発想が必要とされる。逆に自らが考えなければ何も進まないため、自ずと責任感、自立心が芽生えてくる。研究結果に応じた効果は、研究した内容に応じて自分（たち）に返ってくる。もし、付加価値（表彰・新聞掲載・他機会での発表体験等）をつけることができれば、更なる自信につながる。活動を通して、生徒の自尊感情、自己達成感、自己肯定感、自己有用感の醸成を図る。</p>
<p>内 容</p>	<p>○ 自由な研究テーマを設定し、実験や調査をしながら課題の究明に当たり、研究結果としてまとめ、最終的に発表会を開催し、他のメンバーの前で発表させる。</p> <p>○ 研究期間は原則1年間とし、個人、またはグループでの研究も可能とする。また、可能なら各グループに担当教員をつけ、アドバイスをを行う。継続した研究になれば更によい。</p> <p>○ 課題のテーマ、研究方法は自分（たち）で決めさせる。決まらない場合やアイデアが浮かばない場合など、担当教員が参考意見や資料を提供する。</p> <p>○ 専門学科の高校では、科目を「課題研究」としてカリキュラムに組み込み、普通科の高校等では総合的な学習の時間等でも実施が可能である。</p>
<p>実施の時期・場</p>	<p>○ 学校の実情に応じて、期間限定でも実施が可能である。</p>
<p>取組のポイント</p>	<p>○ 生徒自らが主体的に研究に取り組めるよう、教員は様々な機会を捉えて支援する。一方で、生徒にとっての研究の成果は、成功や新たな発見が必ずしもすべてではないことを、生徒に丁寧に説明する必要がある。あくまで取り組む過程に意味があり、また、研究が計画通り進行しないことや、失敗体験の中から得るものが大きいことを生徒に理解させる。</p>

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

○取組事例

活動内容	指導上の工夫・留意事項
<p>1 事前準備 計画立案 (4月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「課題研究」の内容や目的を理解させる。 ・ 過去の研究テーマを示し、イメージを持たせるが、あくまで自らが発案する材料とするよう留意する。 ・ 様々なメディアを使った課題テーマの情報を入手させたり、周囲の身近な疑問にも目を向けさせたりする。
<p>2 材料収集、 実験調査 準備・作成 (5月、6月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 設定したテーマを明らかにするための計画に基づき、準備を行う。安易に商品を購入することに向かわず、自分たちで作成するなど生徒の創意工夫した発想を引き出す。 ・ 生物や自然を研究対象にする場合、時期が限定される場合があるので、目的に応じて授業時間以外も活用して準備に当たるよう指導する。
<p>3 実験・調査 の実施、 実験調査結 果の集計整 理・分析、 必要に応じ た再実験・ 調査 (7月～ 10月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計画立案から発表に至るまで、常に担当教員は生徒の主体性に留意しながら、情報の提供、アドバイス、物品調達及び外部交渉など生徒の活動を支援する。生徒の自由な発想を大切に、教員側の既成概念やもたらされる結果のみに縛られないように注意する。 ・ グループ研究の場合、役割分担に注意し、生徒一人一人が主体的に課題に取り組めるよう支援する。 ・ 時間が限られているので写真や動画等の記録やデータの保管に留意する。また、発表を念頭においたデータ処理に当たらせるよう指導する。 ・ 生徒の安全や外部団体や環境への影響などについては教員が十分注意し、併せて生徒の意識向上を図る。
<p>4 発表会準 備、 発表及び評 価 (11月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 成果発表会は、他学年のほか保護者や外部関係者にも参加していただき盛大に開催する。教員を中心に採点者を設置し、各グループの研究を点数化して評価する。評価の観点は、導かれた結果の優劣ではなく、研究への取組が重視されるよう留意したい。
<p>5 研究集録作 成 (12月～ 2月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動内容は研究集録として取りまとめる。残された結果が次年度の自分たちや後輩にとっての継続研究になるように正確かつ分かりやすくまとめさせる。



将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

事例14 学び直しと学校適応を指導・援助する取組により学校生活・学習への不適応生徒の減少を目指す（高等学校）

【キーワード】 入学前不登校経験者70%、幅広い年齢層、様々な学習歴、各部の連携

目的	○ 学校生活・学習にやや不適応を起こしている生徒への指導・援助を行い、学校への適応を図る。
内容	○ 相談部、保健部、生徒部を中心とし、学校全体で取り組む。
実施の時期・場	○ 年間を通して、前期初旬・後期初旬さらに定期試験前後
取組のポイント	○ 関係分掌の取組と連携 ○ 全教職員による指導・援助

○取組事例

1 中学校訪問

- ・ 前期中中学校訪問
教員2名が出身中学校（約90校）を訪問
入学後の情報提供と在籍時の状況把握
- ・ 後期中中学校訪問
管理職が学校の状況説明と情報交換

2 各校務分掌取組

相談部の取組

- ・ 人間関係を良好にする取組(LHR時)
人間関係構築スキルアップトレーニング
ストレスコーピング学習会、Q-U検査等
- ・ 相談部員やSCによる教育相談・カウンセリング



将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

保健部の取組

- ・ 様々な生徒（心因性疾患等）の相談・訴え（人間関係のトラブル）に養護教諭が対応



生徒部の取組

- ・ 全教員割当てによる校内外巡回指導を実施
〔効果〕 授業の出席率向上、迷惑行為の減少



3 組織的対応

保健部
相談部
担任 } 連携

- ・ 保健部（保健室）・相談部に寄せられた相談→主幹教諭→相談部長→学年主任・担任→情報交換会
- ・ 事例研究会

生徒部
担任 } 連携

- ・ 巡回時に授業不参加・迷惑行為を発見→主幹教諭→生徒部長→学年主任・担任に情報提供と指導内容の検討・実施

情報の共有化

- ・ 情報共有フォルダの作成による情報の共有化

4 成果

- ・ 本校の生徒は、様々なことを経験しており、年齢層も幅広い。全ての教員が共通認識の下、学校適応に向けた組織的な取組を実践することにより、授業への出席率が向上し、結果として、中途退学者が半減した。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

事例15 居心地の良い学校づくりを目指した中学校と高校の連携
～高校生活をスムーズにスタートさせるために～
(高等学校)

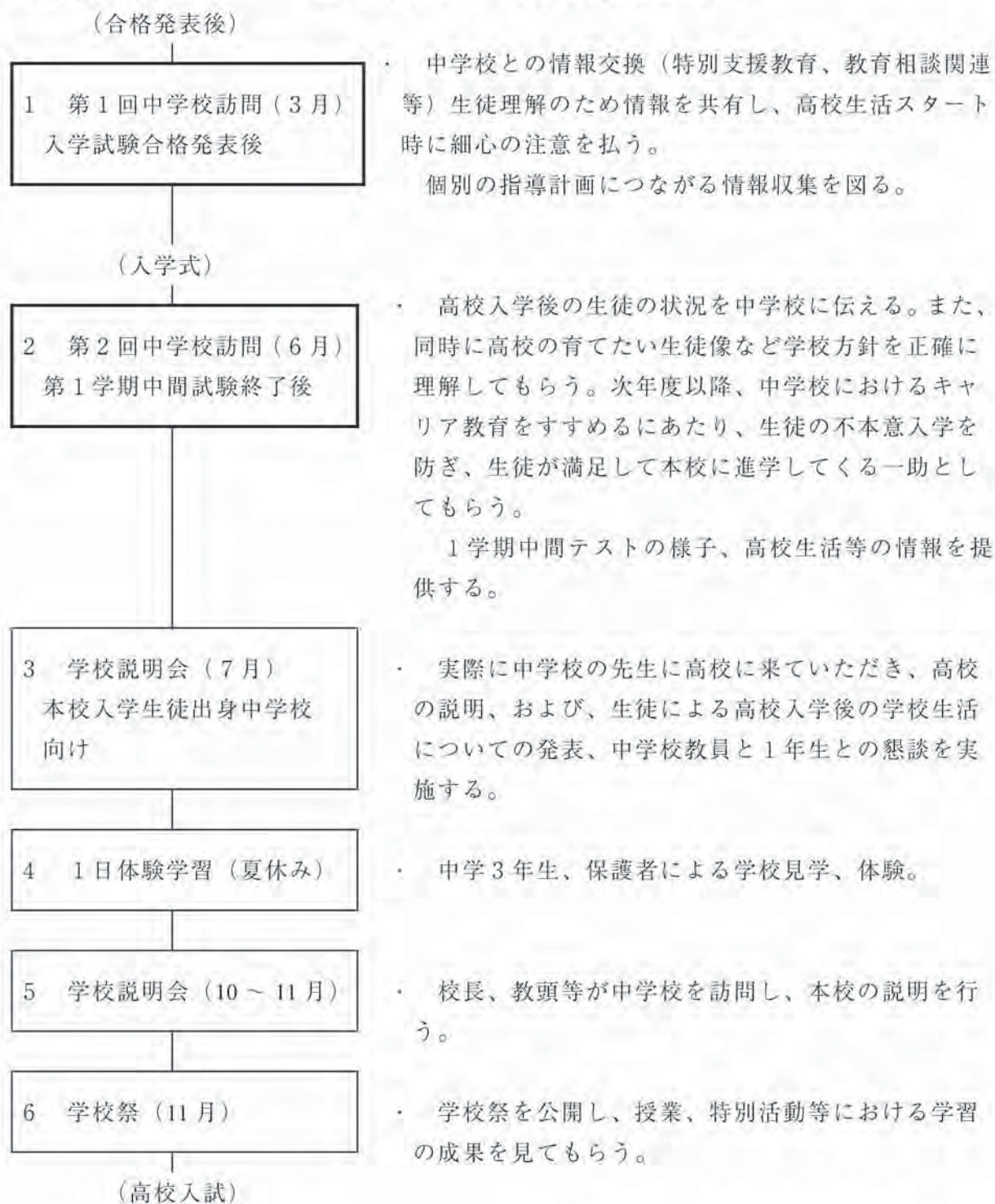
【キーワード】 情報交換、特別支援教育、キャリア教育

目 的	○ 高校生活スタートを重視した効果的な情報交換
内 容	○ 中学・高校相互理解の深化によるキャリア教育の充実
実施の時期・場	○ 中学校訪問 ・ 第1回（3月）入学試験合格発表後 各中学校 ・ 第2回（6月）第1学期中間試験終了後 各中学校
取組のポイント	○ 中学校までの指導の積み上げを継続する。 ・ やりとりする情報 学習面（うまくいっているところ、つまずいているところ） 生活面（うまくいっているところ、つまずいているところ） ※ 生徒がスムーズに学校生活を送る上で、必要と思われることに絞って情報共有化を図る（個別の指導計画に繋げる）。 ○ 入学生徒の高校生活の状況を中学校に伝える。 中学校からの情報に基づき高校が生徒と関わり、うまくいっている点、うまくいかなかった点、新たに発見した点等、情報の交換を行う。 ○ 高校の生徒への支援状況を中学校に理解してもらう。 中学生に学校の特色、育てたい生徒像等を正確に理解してもらい、高校への不本意入学を防ぎ、生徒が自律的に進学してくるための生の情報を提供する。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

○取組事例

主な中学校・高校の連携の機会



3月、6月の中学校訪問をスタートに、中学校と高校とが、学校行事や連絡会議、研修会等のあらゆる機会を通して連携を図ることはとても大切である。本事例のように、中学校、高校が生徒の発達の段階に応じた取組を実践することで、生徒自身が、自分の将来に対して真剣に向き合う絶好の機会になる。

将来の夢や希望の実現に向け、様々な機会に考えさせる場を意図的に設ける取組

4 その他

(1) 発達障害等のある生徒の指導内容等の中学校から高等学校への引継ぎ 特別支援教育室

1 趣 旨

発達障害等の障害のある生徒への指導は、個々の生徒の発達段階や障害の状況を理解した上で、適切に行われなければならない。また、中学校で支援を受けた生徒の中には、高等学校入学後に、学習や生活の変化に適応することが困難な場合もあるため、中学校での指導をもとに継続した指導を早期に開始することが重要である。

そこで、発達障害等の障害のある生徒が、高等学校入学後、円滑に学校生活に移行できるようにするため、保護者や本人の同意のもと、中学校における指導内容等について早期の引継ぎを実施するものである。

2 方 法

(1) 引継ぎ時期

入学者選抜合格発表後から高等学校入学までの期間の中で、可能な限り早い時期

(2) 引継ぎ者

中学校長から高等学校長へ引継ぐ ※1

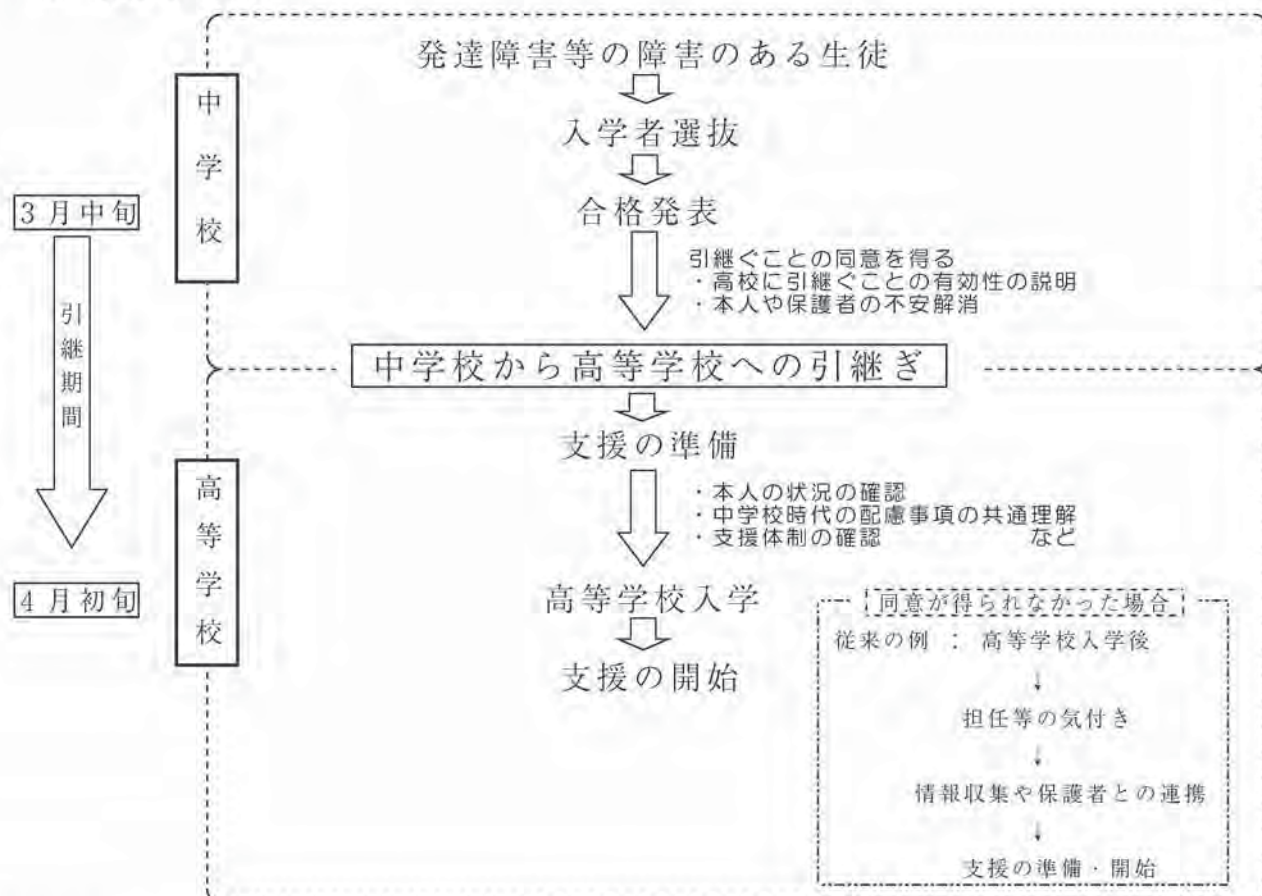
(3) 想定される生徒

従来の配慮受検により合格した者以外の発達障害者、知的障害者(軽度)、視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者、病弱者のうち特別な配慮が必要な生徒

(4) 内容

中学校における指導内容や配慮事項等 ※2 (個別の指導計画等を活用) ※3

(5) 引継ぎの流れ



※1 事務連絡は、教頭又は特別支援教育コーディネーター等が行う。

※2 必要に応じて、障害の状況や高等学校が必要とする情報及び中学校が伝えたい情報等を含む。

※3 個別の指導計画を使用する場合は、**資料1**を使用し、使用しない場合は**資料2**を活用する。

(様式：小・中学校用) 《 個 別 の 指 導 計 画 》

No. _____

学年・組	年 組	担任名
氏 名		

記入年月日	年 月 日
評価予定日	年 月 日

	実 態	指導目標	指導場面	指導の手立て	評 価
学 習 面	【うまくいっているところ】				
	【つまずいているところ】				
生 活 面	【うまくいっているところ】				
	【つまずいているところ】				

※ この「個別の指導計画」の様式及び「記入のしかた」は、栃木県教育委員会のホームページにてダウンロードできます。

<別紙様式例>

栃木県立〇〇高等学校長 様 中学校から高等学校への引継ぎについて このことにつきまして、下記の事項を引継ぎますので、入学時の配慮や対応についてよろしくお願いします。 <div style="text-align: center;">記</div> 1 生徒氏名 2 行動の特徴（得意なこと、苦手なこと、等） 3 指導の手立て（指導上の工夫点）及び配慮事項 4 その他	平成〇年〇月〇日 〇〇市町立〇〇中学校長
---	-----------------------------

※ 箇条書きで記入し、障害の状況等の詳細については説明する。

(2) 関連資料及び相談機関

ア 関連資料

- 栃木県ホームページ→教育・文化→学校教育→児童・生徒指導
→児童生徒指導推進室
- 栃木県「中学生生活と進路」栃木県中学校キャリア教育振興会
日本進路指導協会 共編 実業之日本社 (H22.4)
- 「現職教育資料 通常の学級における特別支援教育」栃木県総合教育センター
- 「学級・ホームルーム担任のための教育相談」栃木県総合教育センター
- 「小・中学校で特別支援教育を進めるために」教員向けリーフレット
栃木県教育委員会 (H17.3)
- 「学級担任による個別の指導計画の活用」教員向けリーフレット
栃木県教育委員会 (平成20.3)
- 「高等学校における特別支援教育～発達障害の理解と適切な支援のために～」
教員向けリーフレット 栃木県教育委員会 (平成20.10)
- 「生徒指導提要」文部科学省 (H22.3)
- 「生徒指導資料第2集 不登校への対応と学校の取組についてー小学校・中学校編ー」国立教育政策研究所生徒指導研究センター (H16.6)
- 「生徒指導資料第4集 学校と関係機関等との連携～学校を支える日々の連携～」
国立教育政策研究所生徒指導研究センター (H23.3)

イ 相談機関

- 栃木県総合教育センター教育相談部 TEL 028-665-7210・7211
不登校やいじめ、非行、障害などに関する相談に応じる
- ホットほっと電話相談
【子ども専用】 いじめ相談さわやかテレホン TEL 028-665-9999
いじめ、自分のこと、勉強や進路のこと、学校や友だちのことなど、子ども専用の電話相談
【保護者専用】 家庭教育ホットライン TEL 028-665-7867
子どもの育児、子育て、しつけなど家庭教育のこと、学習や進路、不登校など学校生活のことなど、保護者専用の電話相談
※電話は年中無休、24時間体制（ただし、家庭教育ホットラインは21:30～翌朝8:30までは留守番電話及びFAXで受付）
【メール相談】
家庭教育や学校生活などの悩みに関するメール相談
<http://www.hothotmail.jp>
<http://www.hothotmail.jp/m.html>（携帯電話からのメール相談）
※メール相談の回答は原則1回とし、その回答には最長7日かかる場合がある
- いじめ・不登校等対策チーム
いじめや不登校をはじめとする問題行動等に対する電話相談に応じる
河内教育事務所 TEL 028-626-3184
上都賀教育事務所 TEL 0289-62-0162
芳賀教育事務所 TEL 0285-82-5274
下都賀教育事務所 TEL 0282-23-3782
塩谷南那須教育事務所 TEL 0287-43-0609
那須教育事務所 TEL 0287-23-2194
安足教育事務所 TEL 0283-23-5479

平成22年度 中途退学未然防止ワーキング 委員名簿

座長	飯田 和男	佐野女子高等学校 教頭
座長代理	早乙女文夫	学悠館高等学校 主幹教諭
委員	小峰 重雄	小山北桜高等学校 主幹教諭
	河原 英明	那須清峰高等学校 主幹教諭
	日向野 晃	鹿沼農業・鹿沼南高等学校 教諭
	橋本 智	栃木農業高等学校 教諭
	田中 邦幸	馬頭高等学校 教諭
	伊藤 正仁	那須高等学校 教諭
	中山 観	栃木県総合教育センター 副主幹
	梅澤 圭子	栃木県総合教育センター 副主幹
	大場 賢治	河内教育事務所 指導主事
	湯澤 信	上都賀教育事務所 副主幹
	小林 洋一	芳賀教育事務所 副主幹
	海老沼 功	下都賀教育事務所 副主幹
	築瀬のり子	塩谷南那須教育事務所 副主幹
	郡司 祥久	那須教育事務所 指導主事
	亀田 哲夫	安足教育事務所 副主幹

○県教育委員会事務局

鶴見 重人	学校教育課児童生徒指導推進室	室長
柳田 伸二	〃	副主幹
伊澤 雅幸	〃	副主幹
小倉 克則	〃	指導主事
長 裕之	学校教育課高等学校教育担当	指導主事

「生徒一人一人の適応感を高めるために」

－中途退学の未然防止に向けた中学校・高等学校の取組－

平成23年3月

発行 栃木県教育委員会事務局
学校教育課児童生徒指導推進室



古紙配合率70%再生紙を使用しています

いきいき栃木っ子3あい運動

学びあい 喜びあい はげましあおう



第24回全国スポーツ・レクリエーション祭
スポレク“とちぎ”2011
平成23年11月5日(土)～8日(火)